

II - 2

考 古 学

2. 考古学

(1) 考古学研究室の発掘調査20年

1977年秋、法文学部史学科に考古学講座が創設され、甘粕が着任した。零からの出発であったが、北限の前方後円墳として著名な菖蒲塚古墳のある角田山麓を当面の研究・教育のフィールドに定めた。菖蒲塚古墳出現の背景となる遺跡群を求めて分布調査を始めたところ、79年には早くも弥生時代後期の高地性集落と方形周溝墓からなる大沢B遺跡を発見、82年まで4次にわたって発掘調査を実施した。この調査により越後平野でも、古墳出現に先立つ戦乱の時期があったことが予測されることになった。また編年の基準になる良質な土器資料が得られた。それらは北陸系を主とし、東北、中部山地、近江、山陰、東海等の型式を含み、古代蒲原の特異な戦略的位置を示唆するものであった。81年には巻町福井の尾根上に古式の前方後方墳、山谷古墳が発見された。幸いにも直ちに測量調査と墳形確認の発掘に取り組むことができ、菖蒲塚古墳に先行する前期前半の首長墳であることが確かめられた。また墳丘下から弥生高地性集落を発見、先の大沢遺跡での戦乱の予測を確かなものにした。

山谷古墳の発掘中、三条市保内の丘陵で前方後円墳が発見されたとの報がはいった。発見されたのは前方後円墳を主墳とする計17基の三王山古墳群である。84年～86年まで3次の調査が行われ首長墳の系列をなす3基の前期古墳と木棺直葬の後期の群集墳が複合した古墳群である事が分かった。三王山11号墳では新潟県では初めての前期古墳の内部主体の発掘が行われ、鏡、玉、剣、鉄斧からなる典型的な前期古墳の副葬セットが発見された。三王山古墳群の発掘の成果を知った巻町の市民の中から山谷古墳の主体部の発掘を期待する声が高まり87年夏、第2次発掘が実現した。この調査では割竹形木棺に伴って玉類を主とする簡素な副葬品が発見され、女性の可能性の強い、古墳出現期の在地首長のアルカイックな相貌が浮き彫りになった。

こうして研究室の発足から10周年にして当初はほとんど不明であった越後平野の前期古墳文化の具体的様相が鮮明に甦ったのである。88年秋、甘粕は「越後における古墳成立期と初期ヤマト政権勢力圏の北限の解明」に対する新潟日報賞を受賞した。これは新潟大学考古学研究室の系統的な地域研究への取り組みに対する、地域社会の評価の現れに外ならない。

越後平野に展開する前期古墳の実態が明らかになると、初期古墳の北方への伝播が、能登半島から海路越後平野へ、越後平野から陸路会津盆地へというルートを取ったと予測されるようになった。古墳出現の前夜に北陸系の土器が会津盆地に滲透する事実も明らかになって来た88年を境に、我々の古墳研究は越後と会津盆地を統一的に把握する方向に転じ、会津盆地にフィールドを拡大した。会津では福島大学、東北学院大学、

福島県立博物館等のスタッフとジョイント・エクスペディションを組み、調査のスケールも一段と大規模になった。会津大塚山古墳は74年に東北大学が主体部を調査し、東北の古代史を書き換えたと云われた成果を挙げた東日本屈指の大型前方後円墳であるが、我々は88年に再測量調査を行った。その結果、それまで90mとされていた墳丘長は114mとなった。また精密な墳丘測量図の作成により、畿内の巨大前方後円墳の造営企画との関連を具体的に検討できるようになった。続いて新たに発見された堂ヶ作山古墳を90年～94年の間に3次にわたって発掘した。その結果、比高200mの山頂に営まれた墳長80mの大前方後円墳の複雑な墳丘構造が徹底的に解明された。また会津大塚山古墳に先行する年代を示す豊富な供献土器の資料を得た。東北の調査と並行して越後平野では川村浩司助手（当時）が中心になって91年に新津市八幡山古墳、92年には弥彦村稲場塚古墳の測量調査が行われ多くの新知見が得られた。八幡山古墳は越後最大の前期古墳、稲場塚古墳は越後最古と推定される前方後円墳である。93年2月刊の『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』（科研総合研究成果報告）と93年10月本学で開催された日本考古学協会新潟大会シンポジウム『東日本における古墳出現過程の再検討』は、本研究室の15年間の古墳研究の中間総括と云うべきものであった。

研究室の古墳調査はその一方で越後平野から県内全域に広がっている。高田平野唯一の前期の首長墳である大潟町丸山方墳、九州系の竪穴系横口式石室が確認された村上市浦田山2号墳、佐渡真野湾岸の横穴式石室墳の計良牧古墳群、橋本博文助教授を中心に調査継続中の東日本屈指の初期群集墳六日町飯綱山古墳群等である。地域ごとに異なった展開を示す越佐の古墳文化の全体像の解明が新たな課題である。

以上の古墳の調査と並行して小野昭教授（現東京都立大学教授）を中心とする旧石器時代・縄文時代の遺跡の発掘調査が系統的に行われていた。朝日村長者岩屋、上川村人ヶ谷等の東部山岳の岩陰遺跡、巻町布目、同豊原等の角田山麓の沖積地の縄文遺跡、水原町大平遺跡、小千谷市真人原遺跡等の旧石器時代遺跡で古環境と生業を統一的に追求する手堅い実験的な発掘調査が重ねられた。岩陰や沖積地の遺物包含層から多数の保存良好な狩猟獣の骨が発見されたことはその成果の一端である。地質学、動物学等自然科学諸分野の研究者との共同も、小野の調査研究の特徴である。

今日の発掘のほとんどが開発のための緊急調査である中で、大学の研究室の教員と学生が一体になって明確な課題を追求して手弁当の学術発掘を続けていることの意義は大きい。一地方大学の小さな研究室が蓄積した考古資料は所詮ささやかなものかも知れない。しかし継続的に課題を追求し試行錯誤を重ねつつ前進するプロセスを物語る遺物群は、生きた地域史の断面であり、一般の博物館や美術館の展示とは異なる魅力があるはずである。

（新潟大学名誉教授 甘粕 健）

(2) 新潟県地域の旧石器時代遺跡

新潟県では後期旧石器時代から人類の痕跡が確認される。地質年代の更新世、約3万年前はヴェルム氷期という寒冷期で、今より気温が低く、氷河が発達し、海面が低かった。そのため日本列島は大陸と接近、或いは陸続きとなり、動植物と共に人類の往来も幾度となく繰り返されたと考えられている。石器群の変遷から後期旧石器時代を4段階に分けると、ナイフ形石器文化 期には、台形様石器、ナイフ形石器に伴い、磨いた刃部をもつ斧形石器も確認されている（坂ノ沢C遺跡、正面ヶ原D遺跡）。ナイフ形石器文化 期には、杉久保系（樽口遺跡）、瀬戸内系（御淵上遺跡）、砂川系（荒沢遺跡、檜ノ木平遺跡）など様々なナイフ形石器を伴う石器群が盛行し、尖頭器文化期（真人原遺跡）へと移行していった。更新世の終わり頃には、細石刃文化（荒屋遺跡、大平遺跡）が、北方系文化の影響下に成立した。東北と北陸の日本海岸に産する頁岩系の石材は関東にまで流通するが、県内でもそれを強く選択する傾向にあった。以降、気候は徐々に温暖になり、縄文時代へと向かうが、細石器と共伴する大型石槍石器群が確認され、移行期の問題が注目される現状である。

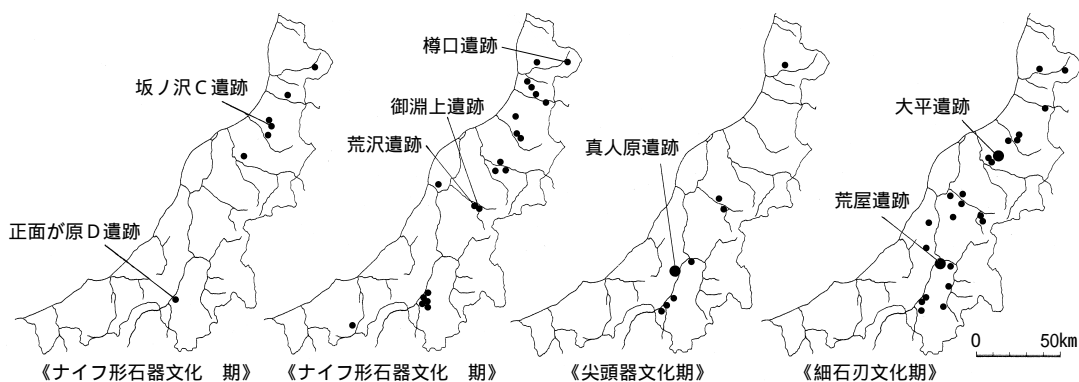


図1 新潟県地域の旧石器時代主要遺跡変遷図



写真1 川口町荒屋遺跡出土石器
細石刃核・細石刃・彫刻刀形石器(左下最大長 6.3cm)

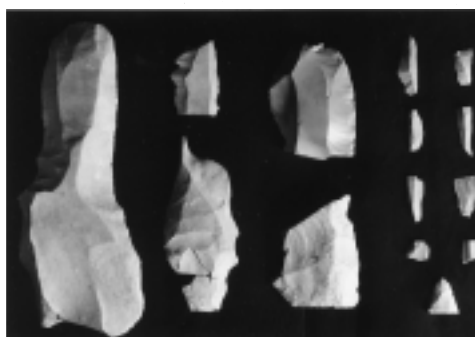


写真2 水原町大平遺跡出土石器
エンドスクレイパー・サイドスクレイパー・細石刃・尖頭器またはナイフ形石器(左最大長 13.2cm)

【真人原遺跡】

真人原遺跡は、小千谷市内を流れる信濃川の左岸、後期更新世末の河岸段丘上に立地し、A・B・Cの3地点からなる後期旧石器時代の遺跡である。

出土遺物としては、尖頭器が剥片・石核を除いた石器のうち非常に高い割合を示し、部分調整尖頭器を中心に両面調整・片面調整・半両面調整の尖頭器がみられる。尖頭器の製作工程をよく示す接合資料も出土しており、遺跡内で尖頭器製作が行われていたことが分かる。石材として使用されるのは珪質頁岩、無斑晶質安山岩が多く、そのほかに珪質凝灰岩、黒曜石が見られる。

遺構としては、礫を半円状に配置した配石遺構が出土している。遺構内は剥片・碎片の類の出土が比較的少なく、石器製作に伴う遺物の出土が遺構以外の区域から多く出土していることから、住居に関連した遺構である可能性が高いと考えられる。

真人原遺跡の編年的位置は、尖頭器を中心とし、かつ細石刃とナイフ形石器を伴わないという石器組成から県内の旧石器文化遺跡において下田村御淵上遺跡以降、川口町荒屋遺跡以前とされ、年代的にはおよそ1.5～1.4万年前の間に位置する。

なお、真人原遺跡発掘調査は1991年の第一次調査から1994年の第4次調査まで新潟大学考古学研究室が主体となって行い、その後主体を東京都立大学に移して現在も継続中である。今後の発掘調査の成果により遺跡の性格などについてさらに詳しい情報が得られることが期待される。
(中村真理・伊部洋明・樋木紀子)

<主要参考文献>

小野 昭ほか 1997 『真人原遺跡』 真人原遺跡発掘調査団

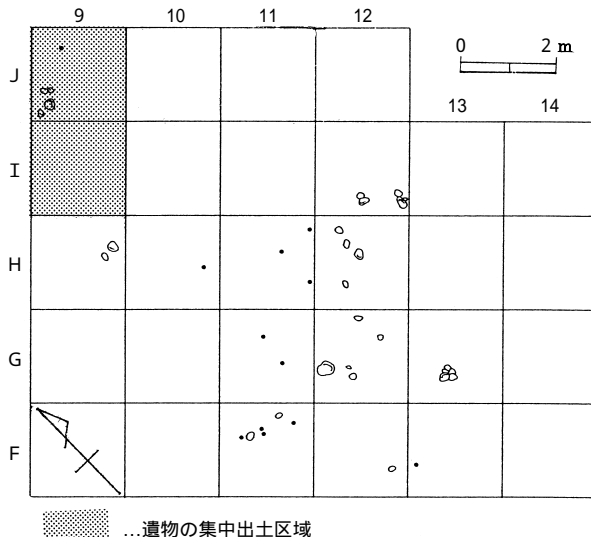


図2 真人原遺跡第層出土の配石遺構
(真人原遺跡発掘調査団 1997一部改変)

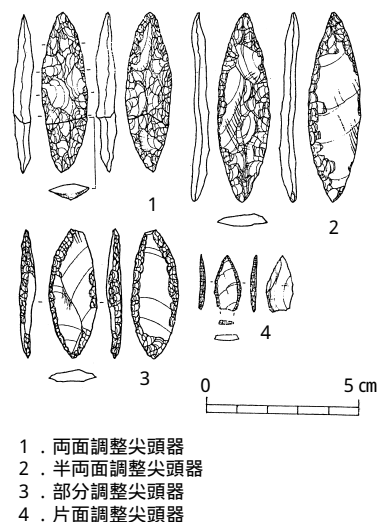


図3 真人原遺跡出土の尖頭器

(3) 新潟県地域の 縄文土器の変遷

【縄文時代草創期・早期の土器】

縄文時代草創期（約12000～10000年前）の土器は、早期初頭の燃糸文系土器群以前の土器群のことであり（小林1977）、新潟県地域においては東蒲原郡上川村小瀬が沢洞窟の最下層より出土した櫛目文土器や押点文土器、上川村室谷洞窟の燃糸文系土器群の下層より出土した羽状縄文土器などがある。

早期（約10000～6000年前）の土器は、関東地方の土器編年でいう燃糸文系土器群・沈線文系土器群・条痕文系土器群・隆帯文系土器群のことであり、中部・近畿地方を中心にした押型文系土器群も見られる。新潟県地域においては中魚沼郡津南町卯ノ木遺跡より出土した押型文土器や室谷洞窟の上層より出土した土器などが知られる。

新潟大学医学部には室谷洞窟より出土した土器片が石器・獣骨と共に保管されている。注記から上層部（黒色土層）と中層部（褐色土層）より出土したものであり、草創期の土器は確認されなかったものの、早期初頭の燃糸文系土器や中葉の沈線文系土器（田戸上層式土器など）、後葉の条痕文系土器が見られる。土器群全体としては関東地方南部のものに近似しているが、地域差も認められる。

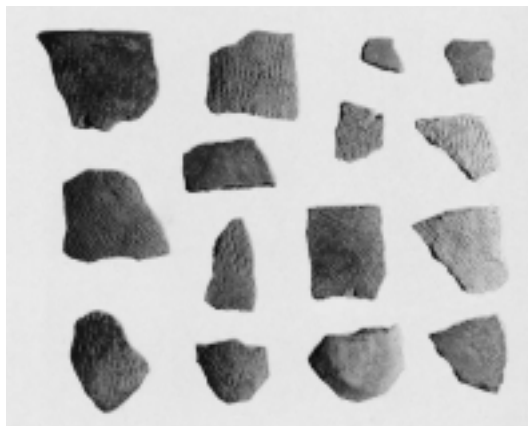


写真3 上川村室谷洞窟遺跡出土縄文早期初頭燃糸文系土器群
(左上口縁部幅 5.1cm)



写真4 上川村室谷洞窟遺跡出土縄文中葉貝殻沈線文系土器群
(右上最大長 8.3cm)



写真5 上川村室谷洞窟遺跡出土縄文早期終末土器群(左上最大長 9.3cm)

【縄文時代前期の土器】

縄文時代前期（約6000～5000年前）の土器は、平底が一般化し、多条縄文で施文することを特徴としている。新潟県地域では前期初頭に県北部を中心に撚糸側面圧痕文土器と非結束の羽状縄文土器が主体を占める一方で、上越地方では北陸的な様相を示している。前期中葉には羽状縄文土器・ループ縄文土器の他に、刺突文・竹管文などで施文される根小屋式土器（寺崎1996）が出現するようになる。さらに前期後半に諸磯式土器が出現してからは信濃川中流域を中心にその文化圏に包括されるようになり、諸磯式消滅後は海岸部を中心に分布する鍋屋町式土器と、内陸部を中心に分布する十三菩台式土器とに二分されるようになる。

【縄文時代前期初頭の土器】

新潟県西蒲原郡巻町布目遺跡は、上原甲子郎氏によって1956年に報告され、新潟大学考古学研究室が1984年に発掘調査を行っている（小野・小熊1987）。ここより出土した土器はこの時期の主流を占めると考えられていた撚糸側面圧痕文土器がほとんど見られず、結束した羽状縄文で施文された土器群が圧倒的な比率で主体を占めており、底部形態が丸底の他に平底が混在していることなどが注目された。

新潟県地域の前期初頭の土器は撚糸側面圧痕文土器を主体とする花積下層式土器に併行する段階と、それらに後続する二ツ木式土器に併行する様相を持つ段階が確認されている。布目遺跡より出土した土器は、その属性が花積下層式の特徴を残しながらも二ツ木式に近い様相を示しており（小熊1994）、時期的にはそれらの中間に位置するものとして理解されている。故に前期初頭の編年の中でも一段階を画するものと考えられることから「布目式土器」とも呼称されている。

【縄文時代中期の土器】

縄文時代中期（約5000～4000年前）の土器は、関東・中部地方の勝坂式土器や北陸地方の火炎土器に代表される縄文土器の中で最も立体的な造形文様を発達させたことで特徴づけられている。新潟県地域では中期初頭は北陸地方の新保・新崎式土器の文化圏に組み込まれるが、中葉に至ると信濃川中流域を中心に火炎土器が出現し、東北地方の大木式土器も見られるようになる。火炎土器が



写真6 布目遺跡出土縄文前期土器

消滅する中期後葉は阿賀野川流域を中心とする大木式土器の文化圏と信濃川上流域を中心とする関東地方の加曽利E式土器の文化圏に二分される。

【縄文時代中期初頭の土器】

新潟大学考古学研究室が関わった中期初頭の遺跡は、新潟県西蒲原郡巻町大沢遺跡（1979～82年）、同町豊原遺跡（1986年）、新潟県新井市原通八ツ塚遺跡（1981年）がある。そのうち大沢遺跡・豊原遺跡より出土した土器群は、半截竹管による半隆起線で文様を描き、蓮華文や格子目文が施される北陸系の土器が主流を占める一方で、原通八ツ塚遺跡より出土した土器群は線刻文や沈線文、刺突列点文など関東地方の五領ヶ



写真7-1 巻町大沢遺跡出土
火炎土器(口縁部幅 22.2cm)



写真7-2 巻町大沢遺跡出土縄文中期
中葉の土器(口縁部幅 15.7cm)



写真7-3 巻町大沢遺跡出土縄文中期中葉の土器(右口縁部幅 17.0cm)









第 1 段 階	  <p style="text-align: center;">1 2</p>
第 2 段 階	  <p style="text-align: center;">3 4</p>
第 3 段 階	  <p style="text-align: center;">5 6</p>
第 4 段 階	  <p style="text-align: center;">7 8</p>

図4 火焰型土器変遷模式図（小林1988を改変）

- 1・2 山下遺跡（新潟県長岡市）
- 3・4・6 岩野原遺跡（新潟県長岡市）
- 5 大沢遺跡（新潟県巻町）
- 7 馬高遺跡（新潟県長岡市）
- 8 千石原遺跡（新潟県長岡市）

台式土器の特徴を有する土器が主流を占めている。この時期の新潟県地域における関東系の土器は原通八ツ塚遺跡を含む頸南地方から魚沼地域を中心に見られ、この地域が関東・中部地方と密接な関係を持っていたものと推測される。

【縄文時代中期中葉の土器】

大沢遺跡より出土した中期中葉の土器は、新潟県在地地域の火炎土器（火焰型土器・王冠型土器などにより構成）に加えて、北陸系の上山田・天神山式土器や東南北部系の大木8式土器などの諸型式が知られ、それらの折衷型も知られる。

火焰型土器は器面全体を隆帯や半裁竹管による半隆起線によって施文し、口縁部にある四対の鶏頭冠と鋸歯状文によって特徴付けられる。鶏頭冠は年代が新しくなるにつれて大型化する傾向にあり、キャリパー形の器形も発達し、器形のバランスを欠くようになる。大沢遺跡より出土した火焰型土器は鶏頭冠の大きさやキャリパーの発達具合などから火焰型土器全体の中でも中頃に位置づけられ、大木8a式土器に併行するものと考えられる。

【縄文時代後・晩期の土器】

縄文時代後期（約4000～3000年前）の土器は、東日本では簡素な粗製土器と精緻な精製土器に分化し、精製土器は器種もバラエティに富むのに対し、西日本では文様のまったくない粗製深鉢が大半を占めるようになる。新潟県では後期初頭に信濃川中流域を中心に三十稲葉式土器が出現し、中期以来の地域性が見られるが、後期中葉以降は東日本全体を覆う文化圏に包括される。後期後半には晩期亀ヶ岡式土器の母胎となる瘤付土器様式の影響を受けることになる。

晩期（約3000～2400年前）は、後期よりもさらに東日本と西日本の差が明確になる。東日本では東北地方を中心にいわゆる亀ヶ岡式土器様式が広く分布し、多様な器種が出現する。一方西日本では、後期以降無文化が進み、晩期終末には凸帯文系土器様式が分布する。新潟県は亀ヶ岡式土器様式の広域分布圏に含まれているが、東北地方とはやや異なる地域性を持っている。特に晩期終末には浮線文系の鳥屋式土器が新潟平野～会津盆地を中心に濃密に分布する。

【縄文時代晩期終末の土器】

新潟県南蒲原郡栄町長畑遺跡は、新潟県教育委員会・栄村教育委員会（当時）がそれぞれ1974・1978年に発掘調査をおこなっている（戸根・本間1975、中島ほか1979）。これらの調査により、本遺跡が縄文時代晩期終末期の浮線文土器を出土すること・甕

形土器や深鉢形土器が主体を占めること・朶痕のある土器片が出土したこと等が報告され注目を集めた。従来浮線文土器は器形が多岐にわたる反面、一般に文様が施される器種が浅鉢形土器等に限られるため編年研究は浅鉢を中心にこなわれてきた（中島・渡邊1989）。長畑遺跡第二次調査（1978年調査）ではこれまで不明確だった甕形・深鉢形土器がきわめて豊富に検出され、浅鉢以外の器種の変遷の把握がなされた（荒川1998）。新潟大学考古学研究室にはこれら第二次調査出土資料が大量に保管されている。

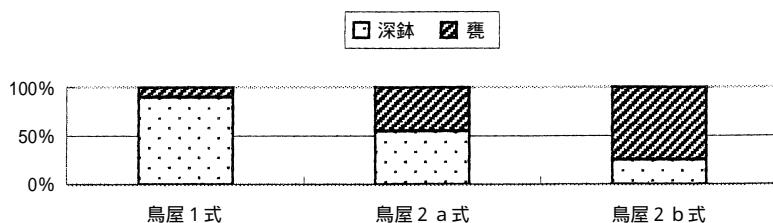


図5 鳥屋式土器の深鉢・甕形土器比率

鳥屋 1 式（福島県山都町沢口遺跡）
 鳥屋 2 a 式（福島県山都町谷地田遺跡）
 鳥屋 2 b 式（新潟県栄町長畑遺跡）
 （荒川1998、石川1993より作成）



写真8 栄町長畑遺跡出土縄文晩期土器群
 （栄町教育委員会寄託、左手前深鉢器高 30.2cm）

新潟県の晩期中葉～終末～弥生初頭の土器型式は朝日式 上野原式 鳥屋1式 鳥屋2a式 鳥屋2b式 緒立式という編年が確立されている。長畑遺跡出土土器は、いわゆる大洞編年では大洞A2・A'式併行に比定され、新潟県内では鳥屋2b式に相当する(磯崎・上原1969、石川1993)。

各型式の器種組成をみると、上野原式は浅鉢・深鉢・壺形土器などが主体を占める。鳥屋1式は上野原式の伝統を引き継ぎ、同様の器種組成を示す。この器種組成は続く鳥屋2a式にも継承される。石川日出志氏の新潟・福島県から出土した鳥屋式各型式の土器組成分析によれば、深鉢形土器は鳥屋1式で80%以上、鳥屋2a式では50%以上という高い比率を示すのに対し鳥屋2b式になると深鉢形土器は激減し、かわって甕形土器が増加するという結果が示されている(石川前掲)。長畑遺跡第二次調査資料で判別し得た167個体の器種構成の内訳は、浅鉢17個体(10%)、甕99(59%)、深鉢33個体(20%)、壺5個体(3%)であり、甕形土器が卓越している(荒川前掲)。甕形土器の増加は弥生時代初期に見られる器種構成と類似した様相を呈しており、新潟県地域では長畑前後に弥生文化の受容がおこなわれたものと考えられる。

(金内 元・古澤妥史)

<引用・参考文献>

- 荒川隆史 1998「新潟県南蒲原郡栄町長畑遺跡出土の土器について - 縄文時代晩期終末の様相 - 」『研究紀要』第2号:71-101(財)新潟県埋蔵文化財事業団
- 石川日出志 1993「鳥屋2b式土器再考 - 六野瀬遺跡出土資料を中心に - 」『古代』95:208-225
早稲田大学考古学会
- 石原正敏 1993「新潟県の諸磯式土器」『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 小熊博史 1994「新潟県における縄文早期末・前期初頭の土器様相」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 小林達雄 1988「火炎土器様式」『縄文土器大観3中期』:303-306 小学館
- 佐藤雅一 1998「新潟県における中期中葉から後葉の諸様相」『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1993「鍋屋町式土器について」『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1995「新潟県における中期初頭の土器 - 関東・中部高地系土器を中心として - 」『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1997「新潟県における前期中葉の土器 - 根小屋式を中心として - 」『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会

(4) 縄文時代の生業

縄文時代の生業を明らかにするために、ここでは新潟県内の縄文時代各時期の7遺跡を取り上げ、各時代の石器組成から分析を行った。以下において、表1より考えられる縄文時代の生業の一側面を(1)時間的变化と(2)地域性に注目しながら述べていく。

(1) 時間的变化

草創期の上川村小瀬が沢洞窟遺跡では、狩猟具（尖頭器・石鏃など）の高い割合と、シカを主とする獣骨片が240点あまり出土していることから、狩猟中心の生業が行われていた様相を呈している。早期以降、磨石・石皿などの採集具の割合が次第に高くなっているが、狩猟が疎かになったとは断言できず、妙高高原町中ノ沢遺跡における陥穴状土坑の発見は、石器使用を主としない方法で狩猟がなされていたことを示す。前期の巻町布目遺跡以降の時期に確認できるような、磨石・敲石類と石皿のセットでの出土の定着は、堅果類製粉などの植物資源の利用が一般化したためといえる。晩期の上川村人ヶ谷遺跡は石鏃のみの出土ということで、他の時期との比較は難しいが、周辺に拠点集落を構えることのできる可能な地形は皆無であることから、獲物は狩猟地で解体された可能性が高く、実際粉碎された状態でのツキノワグマやニホンカモシカなどの獣骨の出土が多い。よって、キャンプ地的性格であったと思われる。

(2) 地域性

立地環境の共通性から、小瀬が沢・中ノ沢・人ヶ谷・長者岩屋の4遺跡と布目・豊原・古四王林の3遺跡に区分できる。前者は、標高200～600mの間にある山間部に存在し、周囲を樹木が繁茂する山地に取り囲まれている。この奥深い立地環境を利用して、狩猟・採集を生業の中心とした食物獲得が為されていたようである。漁労具が出土していないことから考えても、このことはほぼ間違いないといえる。後者では、比較的近隣に潟湖・海・河川の合流点などが存在していた。水産資源の獲得には適した環境に立地していたため、漁労具（石錘）も数点出土しており、低カロリーである水産資源も積極的に利用されていたということである。

補足として、同一地域・同一時期の遺跡間のおもな相違について角田山麓における複数の縄文時代中期遺跡の比較を行いたい。石器組成を数量的に把握できる遺跡として、大沢A・B地区と豊原遺跡を取り上げる。『巻町史』によると、これら3例はほぼ同一の石器リストを構成するものの、豊原遺跡における砥石、大沢遺跡A

凡例

□ 狩猟具...石鏃、有舌尖頭器、スクレイパー、石槍、石匙

▨ 漁労具...石錘

▩ 採集具...磨石、敲石、石皿

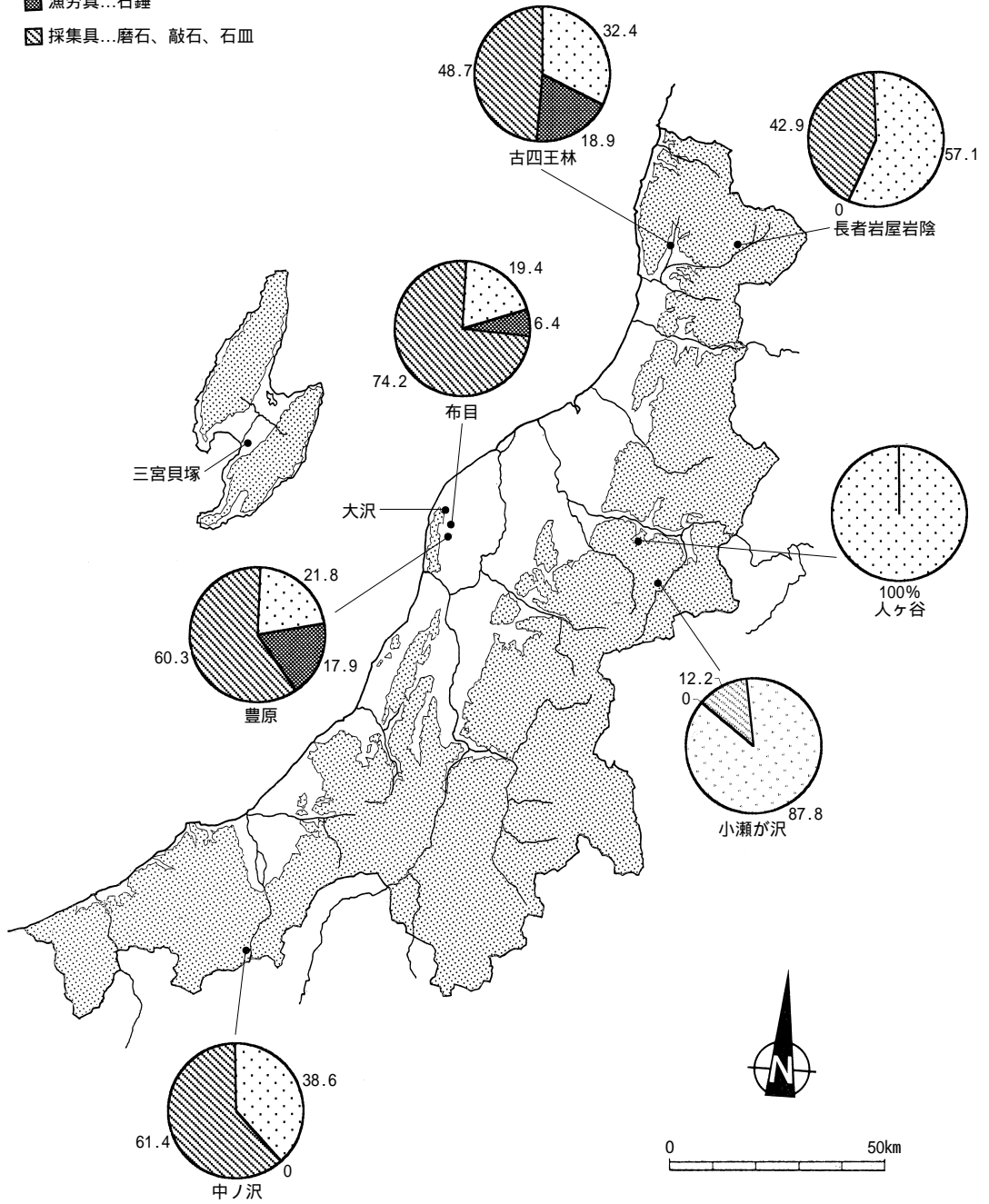


図6 新潟県地域縄文時代主要遺跡各期の石器組成

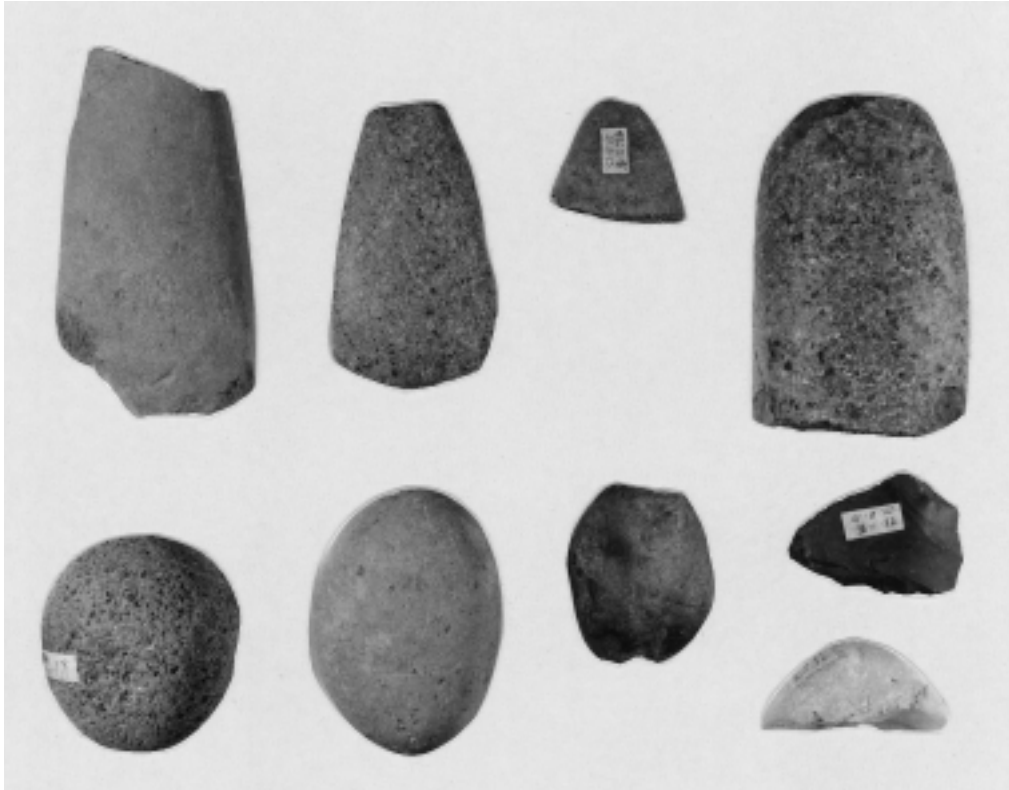


写真9 畑野町三宮貝塚出土縄文後期石器群(上段 - 磨製石斧、下段左2点 - 磨石、
下段左から3番目 - 石錘)(左上磨製石斧最大長 11.3cm)

地区における石鏃、大沢遺跡B地区における磨石・敲石類はそれぞれ高い出現率を示すとされている。このことより、各集落の自給と分業から構成される縄文時代の生業をうかがい知ることができる。

最後に、生業を考える上で重要な手がかりを与えてくれる貝塚の例を提示したい。縄文時代後期に形成された佐渡の三宮貝塚では、狩猟具・漁労具・採集具がバランス良く大量に出土し、さらに貝類・魚類・鳥類・哺乳類の動物遺体も発見されている。豊富に出土する石鏃の存在から、主に弓矢を用いた方法によって、イノシシなどの捕獲が為されていたと推測できる。三宮貝塚の特徴である、サドシジミやイノシシといった特定の動物遺体の出土量の多さは、石器組成という縄文人の技術段階もあわせて考えることで解明できるだろう。このように生業のあり方を明らかにするためには、自然環境と道具の問題についても考察する必要がある。

(浅利洋美・八木貴子)

<参考文献>

前山精明 1997 「角田山麓の縄文文化」『巻町史 通史編(上巻)』: 65-128 巻町

(5) 新潟県内における自然遺物

自然遺物は当時の生業を知る上で大きな役割を果たしている。新潟では自然遺物の残りやすい洞窟や貝塚のほかに御井戸遺跡のような低地遺跡からも多く発見されている。これらの遺跡から出土する自然遺物から当時の生業を狩猟・採集・漁労の3つの視点で見てみることにする。

狩猟：主な狩猟対象になったのは、平野部ではシカ・イノシシ、山間部ではカモシカ・クマであったことが出土数よりわかる。中期の巻町豊原遺跡・前期から晩期にいたる朝日村の長者岩屋遺跡では出土遺物セメント質年輪による死亡季節の研究が行われている。これによると、死亡季節は冬から初春にかけてのものが多く積雪で食料を失った動物たちが山を降りてきたところを捕獲して食していたと思われる。また、豊原遺跡から出土したシカの年齢査定によると一歳未満の幼獣が1例・1～3歳の若齢個体と6～7歳の成獣が3例ずつ・10歳以上の老齢個体が2例確認されていることから、幼獣を避けた選択的な狩猟活動であったと思われる。次に、小動物で目立つのはタヌキ・ウサギ・ムササビである。これらは大型動物が捕獲しにくい時期の補助食物としてのほかに、寒い冬を過ごすために必要な毛皮を目的として捕獲されていたようである。イヌに関しては豊原遺跡でイヌの噛み跡のあるシカの骨が出土していることから、狩猟犬としての役割があった可能性もあると推定される。他県では人と一緒に埋葬されている例もあるが、新潟では今のところ、イヌの埋葬例は見られない。

採集：主な出土遺物はクルミ・クリ・トチの実である。晩期の青海町沖ノ原遺跡ではクリが1.2kgも出土している。また、後期から晩期にかけての巻町御井戸遺跡の一角からは「トチ塚」と呼ばれる厚さ各10cm程度の2層からなる植物層が発見されている。この「トチ塚」から出土しているトチの割合が他の遺跡に比べてかなり大きいことはトチに対する強い食嗜好の表われを示している以外にも、そこから出土しているクルミの半数以上が未利用（完形・自然半割など）であるということと勘案すると、豊富な植物資源があったことも考えられる。堅果類はアク成分が強く遺物として残りやすいため、その数の多さをそのまま利用した植物資源の多さと言うことはできないが、秋には主要食物として食していたであろう。また、出現時期は中期以降で、土器を使ったアク抜き技術の普及と関係があると思われる。

一方、室谷洞穴における淡水産のカラスガイの出土は下流域の水流のない潟等からの採集が想定され、該地との交流・交易が推定される。



写真10 畑野町三宮貝塚出土自然遺物(左 - イノシシ、中央右 - イノシシ、
 右上 - アカニシ、右上2番目 - サドシジミ、右下2番目 - サルボウ、
 右下 - クロダイ)(中段左3番目 - 踵骨最大長 7.5cm)



写真11 朝日村長者岩屋岩陰遺跡出土獣骨(上 - カモシカ、右下2番目 - クマ、
 下中央 - カラスガイ)(カモシカ下顎最大長 18.5cm)

漁労：海岸部では中期頃から漁労が行われていたようである。晩期の青海町寺地遺跡におけるサメの骨6体分の出土や、豊原遺跡におけるクジラの骨の発見などから、外洋に及ぶ大規模なものであったと推測できる。ただし、クジラ漁は組織的な方法を必要とするので、当時の組織的な捕獲活動が確認されていない現状では海岸漂着物を解体していたと考えられる。その他、コイなどの淡水魚も発見されていることから、海洋だけでなく湖沼や川での漁労も行われていたであろう。また、草創期の上川村小瀬ヶ沢遺跡ではウミガメの骨が出土していることは海岸部と山間部との関係を考えるうえで貴重な資料であると言える。

(小柴和彦)

<主要参考文献>

- 小野昭ほか 1987 『人ヶ谷岩陰』上川村教育委員会
 池田次郎ほか 1963 『新潟県佐渡三宮貝塚の研究』佐渡博物館研究報告4
 金沢和夫 1977 「自然遺物」『堂ノ貝塚』：52 金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会
 中村孝三郎 1960 『小瀬が沢洞窟』：42・43 長岡市立科学博物館
 前山精明ほか 1997 「角田山麓の縄文文化」『巻町史』通史編上巻：116-126 巻町

表1 主な動物遺物出土遺跡

遺跡	所在	時期	陸上資源	海上資源	備考
小瀬が沢	上川村	草創期	シカ・イノシシ・クマ・ウサギ・オコジョ・ムササビ		
室谷	上川村	早・前期	クマ・カモシカ・シカ・サル・タヌキ・アナグマ・ウサギ・イタチ・ムササビ・カエル・キジ	貝(シジミ・イソガイ・ヤマトシジミ)	総数約8000点
豊原	巻町	中期	シカ・イヌ・鳥	クジラ・ヒラメ・サケ・ウグイ・サメ	
堂ノ貝塚	金井町	中期	イノシシ・シカ・ウサギ・鳥	シジミ・タイ・フグ	
三宮貝塚	畑野町	後期	イノシシ・シカ・タヌキ・イヌ・ウサギ・鳥	サメ・コイ・スズキ・タイ・アシカ・貝	
御井戸	巻町	後・晩期	シカ・ヘビ	サメ・カレイ・コイ・シロザケ・サドシジミ	昆虫遺体(タマムシ等)出土
寺地	青海町	晩期	イノシシ・シカ・サル・キツネ	サメ・カワハギ	炉状配石中から多くの人骨とともに出土
人ヶ谷	上川村	晩期	カモシカ・クマ・カエル・鳥		
長者岩屋	朝日村	前・晩期	カモシカ・クマ・サル	カエル	

表2 主な植物遺物出土遺跡

遺跡	所在	時期	出土遺物	遺跡	所在	時期	出土遺物
沖ノ原	津南町	中期	クルミ・クリ・ドングリ・トチの実	御井戸	巻町	後・晩期	クルミ・クリ・ドングリ・トチの実・ヒシ・カヤ・オオムギ・籾殻
堂ノ前	関川村	後期	トチの実	寺地	青海町	晩期	クルミ・竹
幕島	分水町	後期	クルミ	長者岩屋	朝日村	前・晩期	クルミ・トチの実
根立	三島町	後期	クルミ・トチの実				

(6) 縄文時代のアスファルト利用

ここに紹介する石鏃は、見附市の佐藤実氏、武田勝衛氏から本学に寄託されたものである。5点あるうちの1は見附市耳取遺跡群からの出土資料で、2～4は栃尾市金沢に所在する金沢東遺跡出土資料、5は金沢西遺跡出土資料である。いずれも縄文時代晩期のもので、表面採集された。1・2は有茎式、3はダイヤ形鏃、4は柳葉形鏃、5は五角形鏃と形態がバラエティに富む。石材は1がチャート、2が鉄石英、3が玉髄、4が瑪瑙、5が頁岩

で、これまた種類豊富である。これらには全て基部に黒色の物質が付着している。この黒色物質は、アスファルトと考えられ、矢柄に矢尻を装着する際に接着剤として利用したものと考えられる。

アスファルトは、現在道路の舗装などに使用されるが、当時はこのように弓矢の製作に使われたり、長岡市岩野原遺跡の縄文後期の割れた土器や土偶の補修、繋ぎに利用された。なお、石鏃のアスファルト付着例は、縄文時代後期になると見られるようになり、晩期にはかなり増加して出現頻度が高くなる。この時期のアスファルト利用の活発化がうかがわれる。

天然アスファルトの産地は、秋田などが有名であるが、石油鉱床地帯に6箇所が確認されている。本県では「石油の里」で知られる新津丘陵の新津市金津地域にある新津油田などにも産する。限られた場所ではしか産出しないこのアスファルトは、土器の容器に入れられたり、塊にして遙々遠隔地に供給されたことであろう。津川町大坂上道遺跡からはアスファルトの入った土器が発見されている。後・晩期の青海町寺地遺跡からもアスファルト塊が出土しており、特産物のヒスイとの物々交換も想定される。

(橋本博文)

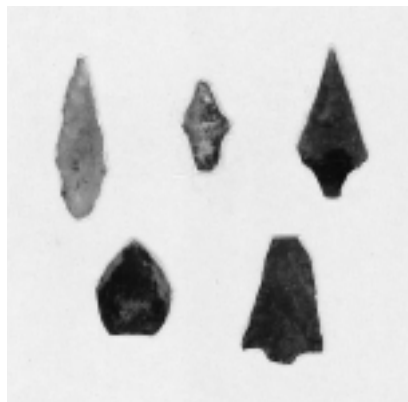


写真12 アスファルト付着の石鏃
(見附市耳取遺跡、栃尾市金沢東遺跡)(佐藤実氏、武田勝衛氏寄託)(左上最大長 3.1cm)

<参考文献>

安孫子昭二 1986「アスファルト」『縄文時代の研究』8: 205-222 雄山閣

(7) 玦状耳飾りと耳栓

玦状耳飾りとは縄文時代早期末葉に中部・北陸地方で出現し、前期後半には関東・東北地方、さらに近畿・九州地方にかけて流行したC字形の装身具のことである。「玦」とは中国の玉器で、腰を締める革帯などに吊り下げた装飾品のことであり、形状がそれに似ているためこの名が付けられた。耳たぶに開けた孔に切れ目から通して垂れ下げて使用した日本列島最初の耳飾りと推定されている。

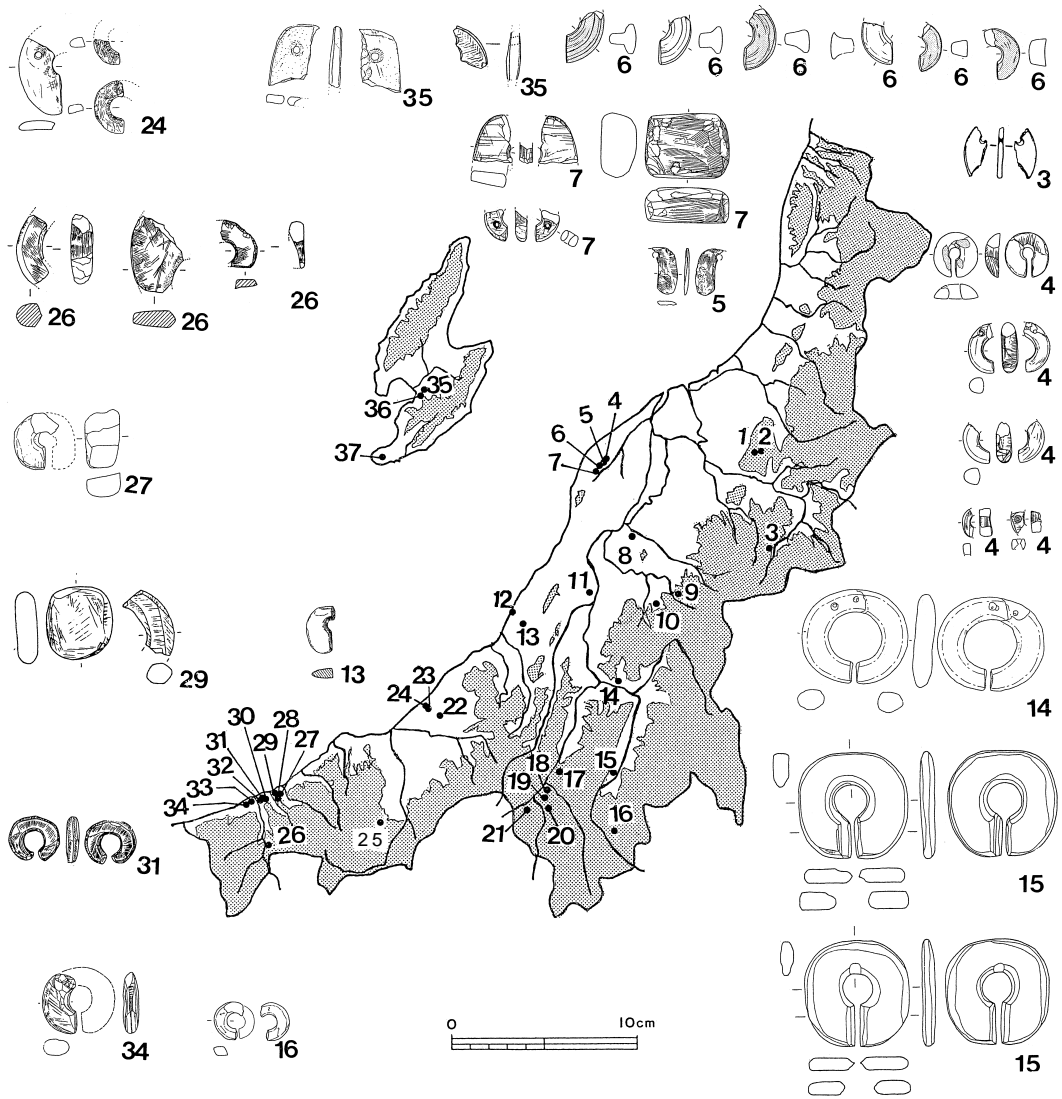
玦状耳飾は用途に関しては長らくわからなかったが、1917・8年に大阪府藤井寺市国府遺跡で合計6体の人骨頭部の両耳部から出土し、耳飾りであることが確認された。その後、神奈川県海老名市の上浜田遺跡、山形県長井市の長者屋敷遺跡、栃木県宇都宮市の聖山公園遺跡（根古谷台遺跡）、新潟県塩沢町の吉峰遺跡などで玦状耳飾りが墓坑に葬られた遺骸の耳部と思われる位置から発見されている。

早期末に中央の円孔が大きく正円形に近い形のもものが登場する。前期になると次第に中央孔が小さくなり、下方の切り込みも外円から中央孔に向けて垂直に擦り切る縦切りから扁平に細長い切り込みを入れる横切りへと変化し、全形も下が長く伸びた縦長形へ変わる。しかし、この分類では中間形や半欠品に対応しきれないため、藤田富士夫氏によって型式率（切れ目の長さ÷孔側の長さ）による編年案が提示されている。断面形は早期末葉～前期初頭・前期前半では円形状となり、前期中頃～前期後半では下辺平坦で上辺がドーム状（蒲鉾型）をなす。県内では前期初めものが原山遺跡から、前期終末のもものが重稲場遺跡から出土している。

また、玦状耳飾りの材質でも、時代によって変化が見られる。縄文早期末葉～前期初頭では軟らかい滑石や蠟石が主流であるが、前期中頃から硬質の蛇紋岩製のものがまじりはじめ、前期終末期になるとほとんどが蛇紋岩製になる。石製の他に、前期後半から土製玦状耳飾りが登場し、関東を中心に流行する。県内でも縄文中期の土製玦状耳飾りが豊原遺跡で発見されている。

玦状耳飾りで一番注目されているのはその起源についてである。中国の玦状耳飾りが日本に伝わったとする大陸伝播説と、玦状耳飾りのようなものは世界各地に民俗例があり、中国のものとは無関係の類似であるとする自生説は、玦状耳飾り研究の初期から唱えられていた。近年では、製作技法の類似、玦状耳飾りの習俗的な使い方に共通性があること、玦状耳飾りの製作が日本海沿岸から始まっていることなど（藤田1983）から、中国長江下流域の石製耳飾りに起源があるとする説が出されている。

この種の耳飾りが縄文前期に流行した後、東日本を中心に中期中葉に登場する耳飾りが耳栓である。耳栓はややくびれた鼓状の土製品で玦状耳飾りと同様、耳たぶに開



- | | | | |
|--------------------|----------------|----------------|----------------|
| 1 畑井 (笹神村) | 11 南原 (長岡市) | 21 下原 (津南町) | 31 原山 (糸魚川市) |
| 2 勝屋 (笹神村) | 12 浜岸 (柏崎市) | 22 福平 (吉川町) | 32 小畑 (糸魚川市) |
| 3 室谷洞穴 (上川村) | 13 刈羽貝塚 (刈羽村) | 23 屋敷割 (大潟町) | 33 大角地 (青海町) |
| 4 天神 (巻町) | 14 清水上 (堀之内町) | 24 丸山 (大潟町) | 34 寺地 (青海町) |
| 5 重稲場 (巻町) | 15 吉峰 (塩沢町) | 25 松ヶ峰 (妙高村) | 35 吉岡惣社裏 (真野町) |
| 6 豊原 (巻町)(土製玦状耳飾り) | 16 岩原 (湯沢町) | 26 川倉 (糸魚川市) | 36 浜田 (真野町) |
| 7 新谷 (巻町) | 17 竜泉寺 (中里村) | 27 小出越 (糸魚川市) | 37 長者ヶ平 (小木町) |
| 8 吉野屋 (栄町) | 18 駒返り (津南町) | 28 岩野 A (糸魚川市) | |
| 9 塩新川 (栃尾市) | 19 堂尻 (津南町) | 29 岩野 E (糸魚川市) | |
| 10 大岡 (栃尾市) | 20 上正面 B (津南町) | 30 長者ヶ原 (糸魚川市) | |

図7 新潟県内玦状耳飾り分布図(スケール1:4)

けた孔に嵌め込んで使う。耳栓は玦状耳飾りとは、その出現期に隔たりがあることや両者の形の変化がスムーズに繋がらないことからまったく別系統の装身具であると考えられている。

耳栓は中期中葉に登場し、耳栓の大型化、装飾化によって滑車型耳飾りが現れる。縄文中期中葉以降耳栓との中間的な形を経て、後期後半には中心にさまざまな文様や幾何学文を施してあるものもある。滑車型耳飾りは縄文後期後葉から晩期にかけて関東・



写真13 耳栓（三条市吉野屋遺跡、見附市黒坂遺跡、武田勝衛氏・佐藤実氏寄託、左下 - 最大径 3.7cm）

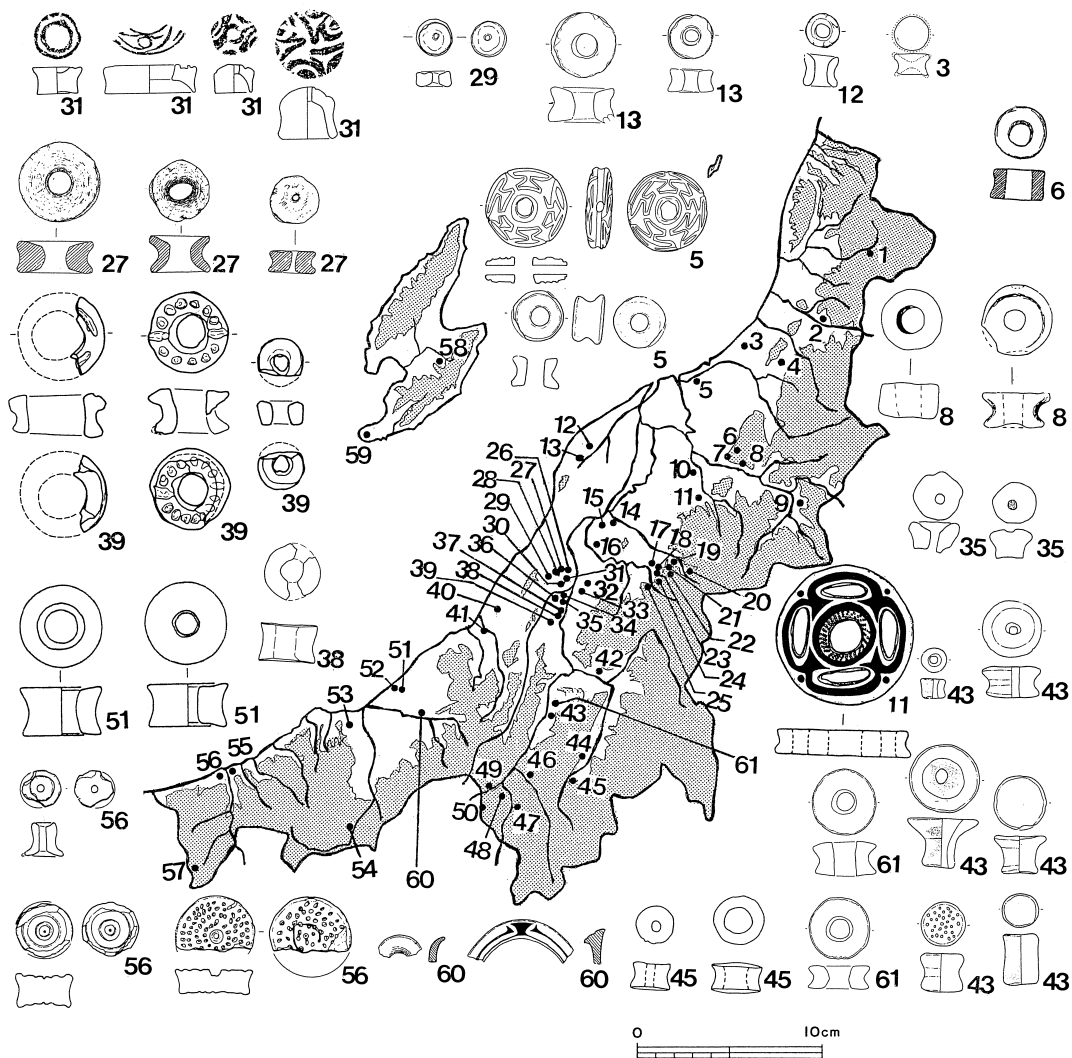
中部を中心に大型で精巧な彫刻文様のある透かし彫り型耳飾りへ発展していった。透かし彫り型耳飾りは、地域を越えて、技法・サイズ・デザインが共通しているものが見つかっており、群馬県千網谷戸遺跡など特定の集落で集中的に耳飾りの生産が行われていたことが確認されている。県内では、藤橋遺跡・鳥屋遺跡から三叉文、浮線網状文を有するものが発見されている。

第7・8図は新潟県内の玦状耳飾りと耳栓の分布である。縄文前期の主要遺跡は十日町盆地を流れる信濃川流域や関川流域に集中しているが、玦状耳飾りは糸魚川地方や角田山麓を中心に各地で未製品を伴って分布している。一方、耳栓は信濃川流域に集中していることがわかる。

本学の調査では豊原遺跡から土製玦状耳飾り6点、耳栓2点が出土している。そして丸山遺跡からは玦状耳飾りが3点発見された。3点とも滑石製であるが、うち2点は縄文時代前期前半のもので、作りが粗い未製品1点を含む。ほか1点は前期後半の早い時期のものと考えられる。これらの発見は隣接地域との交流・大陸伝播を考える上で重要な資料といえるであろう。
(澤野理恵子)

<参考文献>

- 藤田富士夫 1992『玉とヒスイ 環日本海の交流をめぐって』 同朋舎出版
藤田富士夫 1988「玦状耳飾の編年に関する一試論」『北陸の考古学』：85-103 石川考古学研究会
原田昌幸 1988「縄文人たちと装飾具」『古代史復元3 縄文人の道具』：122-126 講談社
小野昭ほか 1988「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』：1-71 巻町
山川史子 1988「石器」『丸山遺跡発掘調査報告書』：43-46 大潟町教育委員会



- | | | | | |
|--------------|--------------|--------------|---------------|---------------|
| 1 三面元屋敷(朝日村) | 13 豊原(巻町) | 25 吹田(栃尾市) | 37 三仏生(小千谷市) | 49 反里(津南町) |
| 2 堂ノ前(関川村) | 14 吉野屋(栄町) | 26 南原(長岡市) | 38 百塚東E(小千谷市) | 50 釜坂(津南町) |
| 3 村尻(新発田市) | 15 黒坂(見附市) | 27 馬高(長岡市) | 39 城之腰(小千谷市) | 51 長峰(吉川町) |
| 4 貝塚(加治川村) | 16 耳取(見附市) | 28 三十稲場(長岡市) | 40 刈羽貝塚(刈羽村) | 52 鳥々島(大潟町) |
| 5 鳥屋(豊栄市) | 17 金沢(栃尾市) | 29 牛池(長岡市) | 41 十三仏塚(柏崎市) | 53 山屋敷(上越市) |
| 6 村杉(笹神村) | 18 栃倉(栃尾市) | 30 岩野原(長岡市) | 42 清水之上(堀之内町) | 54 籠峯(中郷村) |
| 7 藤堂(安田町) | 19 長野(下田村) | 31 藤橋(長岡市) | 43 笹山(十日町市) | 55 長者ヶ原(糸魚川市) |
| 8 ツベタ(安田町) | 20 赤松(下田村) | 32 中道(長岡市) | 44 上ノ台(六日町) | 56 寺地(青海町) |
| 9 キンカ杉(上川村) | 21 石倉(栃尾市) | 33 山下(長岡市) | 45 五丁歩(塩沢町) | 57 禅生(妙高村) |
| 10 大蔵(五泉市) | 22 入塩川(栃尾市) | 34 朝日(越路町) | 46 森上(中里村) | 58 矢田ヶ瀬(新徳村) |
| 11 矢津(村松町) | 23 柿ノ木田(栃尾市) | 35 多賀屋敷(越路町) | 47 反里口(津南町) | 59 長者ヶ平(小木町) |
| 12 松郷屋(巻町) | 24 大蔵(栃尾市) | 36 俣沢(小千谷市) | 48 沖ノ原(津南町) | 60 顕聖寺(浦川原村) |
| | | | | 61 野首(十日町市) |

図8 新潟県内耳栓分布図(スケール1:4)

(8) 縄文時代の呪術・信仰 - 大沢遺跡出土土偶について -

本学考古学研究室に保管されている土偶（カラー写真 - 2・3、図9）は、巻町大字稲島に位置する大沢遺跡B地区斜面部から出土した。頭部・胴上半部を欠損する。腹部は出っ張り、背面はやや反り平坦になり、未発達ではあるが脚部がある。形態的にはいわゆる河童形土偶に属する。文様は竹管による平行沈線で、胴部中央の正中線を中心にG字文・S字文が左右対称に描かれる。縄文時代中期中葉の所産であると考えられる。

本例に類似する資料は周辺地域で数例を確認することができる。県内では、小木町長者ヶ平遺跡（図10 - 1）・新発田市古屋敷遺跡（図10 - 2）、県外では富山県福光町竹林I遺跡・八尾町妙川寺遺跡（図10 - 3）、長野県飯山市深沢遺跡（図10 - 4）などから出土した資料があげられる。

大沢遺跡と上述の諸遺跡との間には、石材の受給等で密接な関係が伺えることから、本例類似の土偶分布は、日本海沿岸ルートを中心とする交易・文化圏の存在を裏付ける重要な資料となるものと考えられる。
（古澤妥史）

<参考文献>

- 甘粕 健ほか 1981『大沢 - B、B 地区の調査概報』：24-25 巻町・潟東村教育委員会
 駒形敏朗 1992「新潟県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集：298-309
 巻町 1994『巻町史』資料編1 考古：270-291
 増子正三 1998「新発田市古屋敷遺跡の縄文中期の土器と土偶」『北越考古学』第9号：54-55

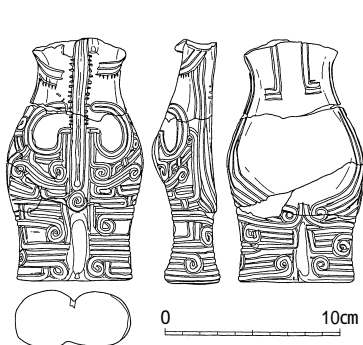


図9 新潟県巻町大沢遺跡出土土偶（本学所蔵）



図10 周辺地域における類例（大きさ不同）

(9) 北陸・越後の高地性集落

水田稲作農耕の発達に伴い比較的低位に集落が営まれることが多かった弥生時代において、丘陵尾根上など水田面との比高が高い場所に営まれた集落を「高地性集落」と呼んでいる。そのような立地をとった背景・理由については様々な説が出されている。その中でも「防御のため」というものが注目されている。越後にも「倭国大乱」の波及を物語るものとされる高地性集落が、以下のように発見されている。

1. 主な越後の高地性集落調査概要

新井市斐太遺跡群が、1955年に東京大学考古学研究室により調査された。これにより堅固な環濠を持った丘陵上の大規模な高地性集落であることが確認された。1972年には村上市滝ノ前遺跡が同市教育委員会により調査され、天王山式土器を主体とする集落であることが知られた。続いて1979年の巻町大沢遺跡の調査や、1982年の同町山谷古墳の調査とそれに伴う下層遺跡の調査は、本学考古学研究室が主体となった調査である。その中でも大沢遺跡の菖蒲塚に先行する方形周溝墓とその基盤となる高地性集落の発見は、その後の本学考古学研究室の研究の方向性にも多大な影響を与えた。すなわち越後の弥生時代から前期古墳の出現過程ということが重要なテーマになっていったのである。その後、1986年に新津市古津八幡山遺跡の調査が、同市教育委員会により行われ、大規模な高地性集落であることが判明すると共に、日本最北の環濠集落であることが明らかになった。また、1997年上越市の裏山遺跡が高速道路建設に伴い、高地性集落としては県内ではじめて全面的な発掘調査が行われ、遺跡としての重要性を指摘する声が高まったが、調査ののち破壊された。

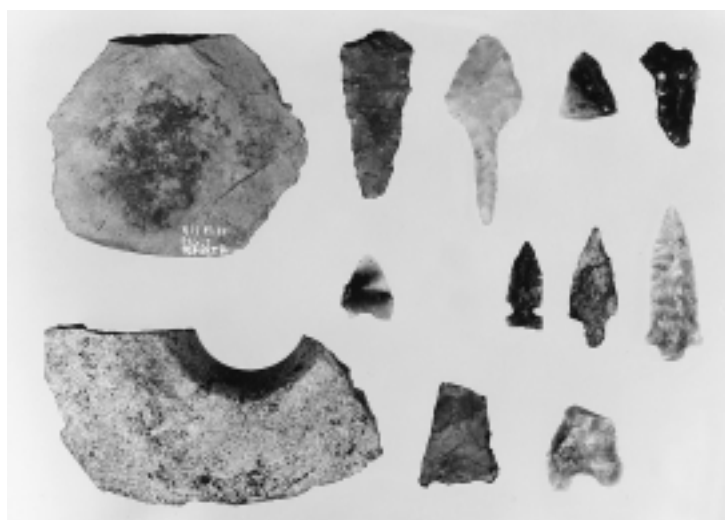


写真14 巻町山谷古墳下層遺跡出土石器群（左下 - 環状石斧、中段右から3番目 - アメリカ式石鏃）巻町教育委員会所蔵（左下最大長 8.11cm）

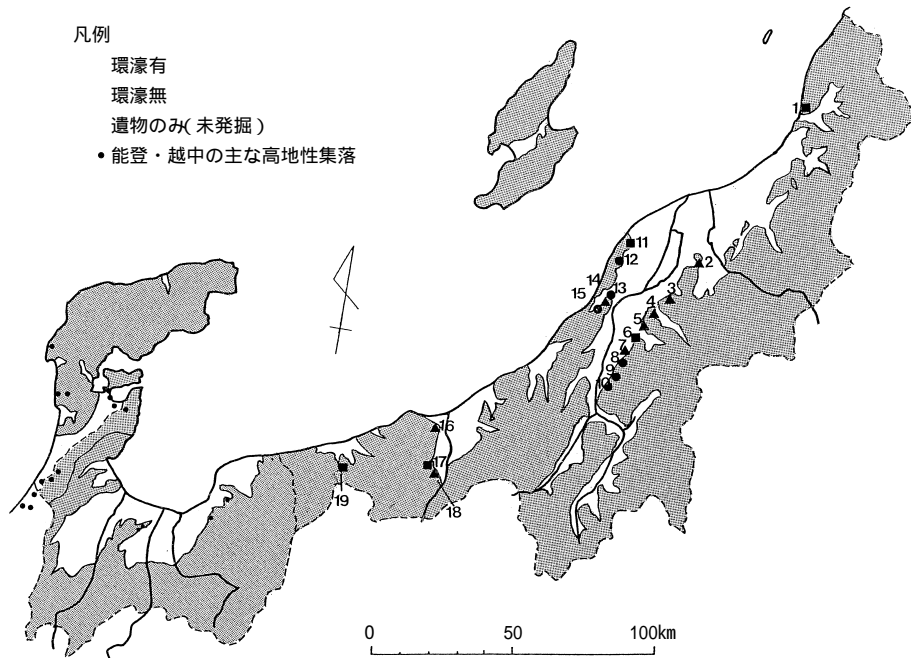


図11 能登、越中、越後の主な高地性集落（番号は下表と対応）

表3 県内の高地性集落地名表

遺跡	立地概要	主要土器構成	住居	環濠	備考
1 村上市滝ノ前遺跡	標高40m比高40m 河岸段丘上	天王山系、北陸系、 古式土師器	3		環状石斧、アメリカ式石鏃、紡錘車、土錘 出土。遺跡の大半は削平されている。
2 新津市八幡山遺跡	標高54m比高43m 独立丘陵上	天王山系、北陸系	28	V字型	高地性集落廃棄後に前方後方形周溝墓、造り出し付円墳が造営。
3 三条市二ツ山遺跡	標高90m比高70m 丘陵尾根頂部			溝状遺構	
4 三条市経塚山遺跡	標高40m比高40m 丘陵尾根		3	V字型	鉄斧出土。
5 見附市大平城遺跡	標高100m比高70m 丘陵尾根頂部	北陸系		V字型	廃棄後に墳墓造営。
6 見附市岩沢遺跡	標高70m比高40m 河岸段丘上	北陸系、北信系	4		
7 長岡市横山遺跡	標高26m比高6m 独立丘陵上	天王山系、北陸系 北信系、東海系	4	V字型	遺跡のほとんどが破壊されている。方形周 溝墓らしきものも見つかっている。
8 長岡市原山遺跡	標高34m比高14m 独立丘陵上	天王山系、北陸系 北信系			不連続のV字型掘り込み。アメリカ式石鏃、 玉類出土。
9 長岡市賢正寺遺跡	標高86m比高45m 独立丘陵上	天王山系、東海系 北陸系			アメリカ式石鏃出土。
10 長岡市阿部山遺跡	標高100m比高65m	天王山系			
11 巻町大沢遺跡	標高38m比高33m 丘陵尾根先端	天王山、北陸系	2		アメリカ式石鏃出土。高地性集落廃棄後に 方形周溝墓。
12 巻町山谷遺跡	標高55m比高43m 丘陵上	天王山系、北陸系			環状石斧、アメリカ式石鏃出土。廃棄後に 前方後方墳。刀子、鉄製品。
13 和島村横滝山遺跡	標高比高15m 丘陵頂部	天王山系、北陸系			扁平方刃石斧、アメリカ式石鏃出土。
14 和島村赤坂遺跡	標高90m比高80m		有り	有り	住居、環濠を確認するも詳細は不明。
15 和島村太平遺跡	標高35～60m比高 15～40m丘陵頂部	天王山系、北陸系			管玉の玉作遺跡か。
16 上越市裏山遺跡	標高90m比高70m	天王山系、北陸系	8	L字型	環状石斧、鉄製鍬先、砥石出土。
17 上越市下馬場遺跡	標高50m比高30m 丘陵尾根上		4		住居と時期が近接する円墳（円形台上墓か）
18 新井市斐太遺跡	標高60m比高40m 独立丘陵上		71?	有り	百両山、上ノ平、矢代山遺跡から成る。住 居址とされる窪地が71カ所で確認。
19 糸魚川市後生山遺跡	標高40m比高30m 河岸段丘先端	北陸系	4		翡翠や、緑色凝灰岩の玉（未製品含む）出 土。住居址3棟は玉作工房か。



写真15 新井市斐太遺跡出土弥生式土器
(左から2番目壺復元口径 12.9cm)



写真16 巻町山谷古墳下層遺跡
出土弥生式土器
(東北系) 巻町教育委員会
所蔵) 口径 12.0cm)

2. 越後の高地性集落の分布 (図11)

越後の高地性集落は、大きく分けて信濃川の東西岸、上越地域に固まって分布している。信濃川の東岸は西岸に比べて規模も大きく環濠を持つものも多い。

3. 越後の高地性集落の性質 (表3)

越後の高地性集落の主要土器構成は基本的に、西に方ほど北陸色が強く、東の方ほど東北色が強い。しかし、細かく見ていくと長岡市の原山遺跡、阿部山遺跡では天王山系土器が主流となっているものの、それよりも東の古津八幡山遺跡などでは天王山系の土器は主流にはなっていない。そのような土器分布の背景には、高地性集落において他地域との複雑な交流関係があったものと想定される。

4. 高地性集落の終焉

高地性集落は、西日本・近畿で廃棄された後でも、北陸ではしばらく継続する。能登・石川では越後に先行して、新潟シンポ編年の3期以降は廃絶に向かい、その後前期古墳が営まれることが多い。越後でも新潟シンポ編年の4～5期に廃絶に向かう。その後にはやはり前期古墳が営まれることが多い。それに前後する時期、北陸の土器が越後を介して東北、北信地域に広がっていく。それまで東北色が強かった越後地域も、北陸色一色となっていく。このような土器の動きから、北陸を介した近畿勢の東北進出といったことも想定されている。(飯野 隆将)

<参考文献>

甘粕 健・春日真実編 1994『東日本の古墳の出現』：7-73 山川出版社
長岡市 1992『長岡市史』資料編1 考古：487-558 長岡市

(10) 新潟県地域の外来系土器
- 弥生時代後期から古墳時代初頭の様相 -

1. 外来系土器とは

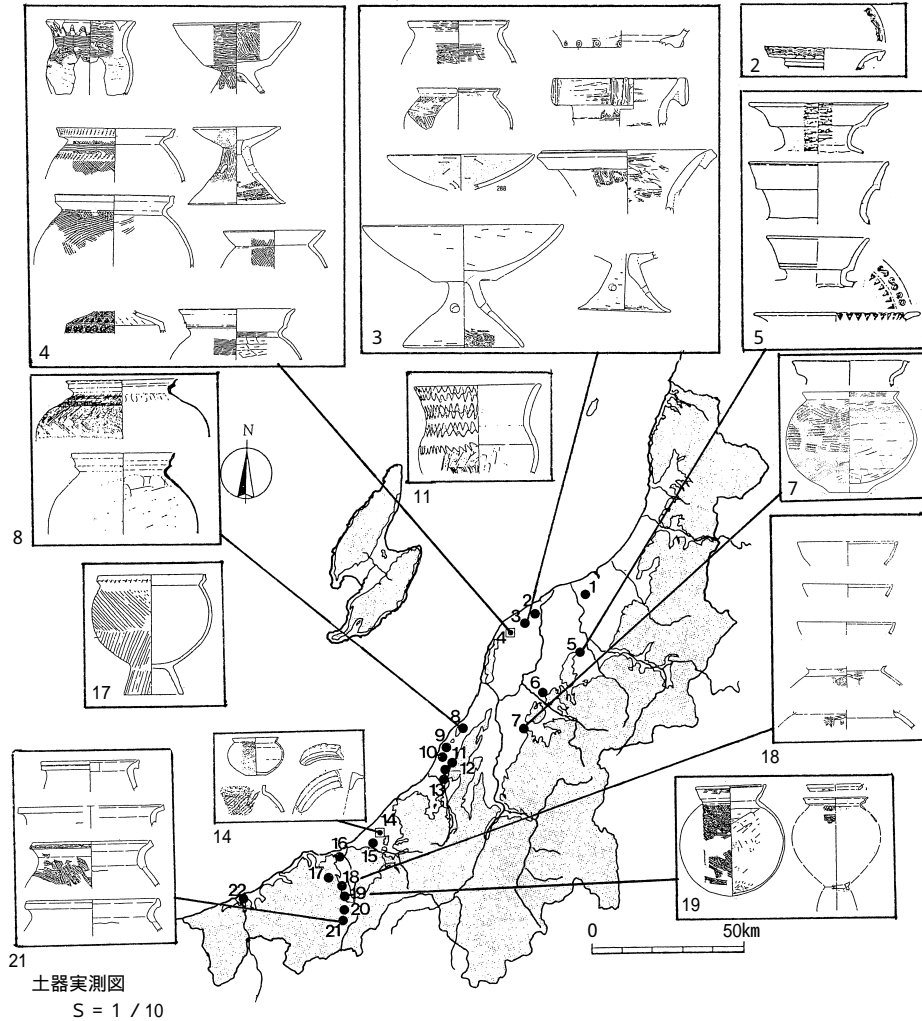
土器は時間の流れと共にそれぞれの地域の特徴を持って発達してきた。しかし遺跡の調査を行うと、その地域とは異なった地域の特色を持つ土器が時折現れる。それらの土器を在地のものと区別して「外来系土器」という。土器が移動することは、土器の形態、その胎土、在地の土器との関係から、土器そのものが搬入された、外来の土器を模倣して製作した、土器製作の技術者が移住してきた、というように土器だけでなく、人の移動も含まれてくる。その理由にも商業的流通、当時の技術者であった女性の婚姻による移住、集団の入植など様々な場合が考えられる。このように外来系土器は地域間の交流を如実に表す貴重な資料といえる。

2. 新潟県地域の土器組成

当地域の土器型式は主に北陸編年に組み込まれている。北陸地方では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて近畿地方の影響と共に山陰の影響を受けた凹線文を特徴とする土器型式が成立した。新潟平野に現れる北陸系土器は特に能登半島のものと同様であり、海路で直接伝えられたものと考えられている。その一方で会津地方に近い地域では東北系の土器が北陸系のものに比して多くを占める。東北南部の土器型式である天王山式土器は石川県を西限に広範囲にわたって分布するが、県南部にゆくにつれその割合が減少する。新津市八幡山遺跡の立地する新津丘陵では東北系と北陸系の土器の割合が半分か、もしくは東北系の方が上回っている。高地性集落とも関連して、当時のこの地域における北と南の勢力関係に何らかの示唆を与えている。

この他、長野県地域と接する所では中部高地系（信濃系）の土器が北陸系と同様に土器組成の多くを占めている。そして全国的にも広く分布する東海系土器は弥生時代から古墳時代の移行期の北陸の土器組成に大きな影響を与えている。特に加賀、能登では東海系高坏と小型器台の定着が顕著で、県内においても中郷村籠峰遺跡等の頸城平野南西部を中心にS字状口縁甕が在地の甕に混ざって数点確認されている他、新潟平野の黒埼町緒立C遺跡でも認められている。しかし出土数は極めて少なく、客体的な存在であったとみられる。また、新潟県地域から他の地域へ出ていった土器の存在も忘れてはならない。それらは交流が一方通行のものではなく、お互いに行き来していた事を物語っている。

(須田智美・呉 賢欄)



- | 遺跡名 | 出土した外来系土器 |
|---------------------|--|
| 1 山三賀 遺跡(聖籠町) | 畿内系有段口縁甕、畿内系小型埴、畿内系長頸壺 |
| 2 六地山遺跡(新潟市) | 東海系高坏 |
| 3 緒立C遺跡(黒埼町) | 東海系S字状口縁甕、東海系二重口縁壺、東海系高坏、近江系受け口状口縁甕、畿内系有段口縁壺 |
| 4 大沢遺跡(巻町) | 中部高地系櫛描文、東海系高坏、山陰系スタンプ文、近江系受け口状口縁甕 |
| 5 狐崎遺跡(三条市) | 東海系二重口縁壺、畿内系有段口縁壺、山陰系スタンプ文 |
| 6 長峰遺跡(吉田町) | 畿内系小型器台 |
| 7 横山遺跡(長岡市) | 東海系高坏、近江系受け口状口縁甕、畿内系叩き甕、山陰系土器 |
| 8 高塩B遺跡(西川町) | 東海系S字状口縁(台付) 甕 |
| 9 刈羽太平遺跡(刈羽村) | 中部高地系土器 |
| 10 小丸山遺跡(刈羽村) | 中部高地系土器 |
| 11 西谷遺跡(刈羽村) | 中部高地系櫛描文、台付甕 ? |
| 12 行塚遺跡(柏崎市) | 畿内系器台 |
| 13 戸口遺跡(柏崎市) | 近江系受け口状口縁甕 |
| 14 丸山遺跡(大潟町) | 近江系小型壺、近江系手焙型土器、畿内系叩き目土器 |
| 15 津倉田遺跡(上越市) | 畿内系布留式甕、山陰系 ? 東海系 ? |
| 16 一之口遺跡(上越市) | 中部高地系櫛描文、東海系S字状口縁(台付) 甕、東海系高坏、近江系受け口状口縁甕 |
| 17 上の平24号住居跡(新井市) | 東海系S字状口縁(台付) 甕 |
| 18 横引遺跡(中郷村) | 東海系S字状口縁台付甕、畿内系布留甕 |
| 19 籠峰遺跡(中郷村) | 東海系S字状口縁台付甕、畿内系布留甕 |
| 20 小野沢西遺跡(妙高村) | 畿内系布留甕 |
| 21 大洞原C遺跡(妙高村) | 東海系S字状口縁台付甕、畿内系布留甕、中部高地系、近江系土器 |
| 22 笛吹田遺跡(糸魚川市) | 山陰系スタンプ文付土器 |

図12 新潟県地域の外来系土器出土遺跡分布図

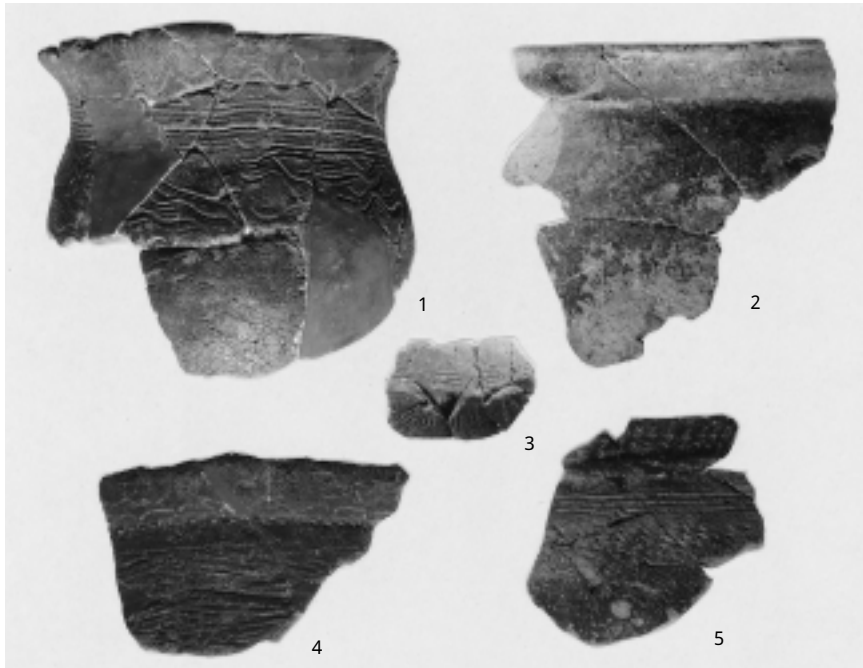


写真17 巻町B'遺跡出土外来系土器(左上 - 中部高地系(口径 11.7cm)、
右上・右下 - 近江系(上・口縁最大長 10.7cm、下・脚部最大長 7.4cm)、
左下 - 東北系(最大長 10.5cm))



写真18 巻町B'遺跡出土
土師器器台(器高 10.0cm)



写真19 巻町B'遺跡出土土師器小型高坏
(東海系)(口径 16.1cm)

<参考文献>

- 甘粕 健ほか 1994「大沢遺跡B'地区」『巻町史』資料編1 考古：407-425 巻町
小野 昭ほか 1988『丸山遺跡発掘調査報告書』：37-41 大潟町教育委員会
川村浩司 1988「新潟県籠峰遺跡出土の外来系土師器3例」『新潟考古学談話会会報』1：50-60
新潟考古学談話会
川村浩司 1993「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』
2：15-36 新潟大学環日本海地域比較史研究会
滝沢規朗 1993「越後における古墳出現前夜の土器の様相 - 甕の類別構成比と内面調整を中心に - 」
『新潟考古学談話会会報』11：9-17 新潟考古学談話会

(11) アメリカ式石鏃について

弥生時代の石鏃のなかにアメリカ式石鏃と呼ばれるものがある。基部に独特な突起をもち、名称は、アメリカの先住民が使用していた石鏃に形が似ている事に由来するが、時期差・距離差があるため、系譜上直接的につながるとは考えにくい。新潟大学考古学研究室では、巻町の大沢遺跡から表面採集された頁岩製のアメリカ式石鏃1点を所蔵している。東北中・北部、仙台平野から阿武隈にかけての地域では、アメリカ式石鏃の石材はその地域の一般的な石器石材と共通する様相であるとされ、新潟県でもこれと共通した傾向がうかがえる。石材からみる限り、ある特定の地域遺跡から一元的に供給されたのではないといえる。また、新潟市六地山遺跡のように大量出土例もあるが、現在のところアメリカ式石鏃の生産遺跡といえるものは発見されていない。

出土範囲は北海道から福岡県までと広範囲で、その分布は宮城・福島・新潟に集中している。時期については明確に共伴する資料が少ないため不明な点が多いが、新潟県出土のものについては、天王山式土器に伴うものが多い。現在までの出土例から、主な存在時期が弥生前期から後期にかけてとされるが、福島県田村郡堂平B遺跡から大洞C式期土器（縄文晩期）と共伴してアメリカ式石鏃様のものが出土したことから、その初現は弥生前期よりも遡る可能性がある。一番新しいと思われる出土例は、古墳時代前期のもので、石鏃がみられなくなる時期はこのころと考えることもできる。

また、石材が軟質である例もあり、武器や狩猟具としてとらえるには難しい例も出てくる。防衛的な性格を有する環濠集落や高地性集落との関わりについて、新潟県を例にみると、アメリカ式石鏃が出土している遺跡のうち、環濠集落と高地性集落の2つの性格をあわせもつ新津市八幡山遺跡、高地性集落とみられる大沢遺跡、山谷古墳下層、堅正寺遺跡、滝の前遺跡からの出土数は各1～2点と少ない。よって、アメリカ式石鏃を武器としてとらえることは難しいといえる（石原1996）。

用途については、合口甕棺内から出土した岩手の常磐広町遺跡、方形周溝墓の墓坑内から出土した新潟の八幡山遺跡例から祭り用に使用されたと考えることができる。また、当初は実用的な狩猟具としての石鏃だったが伝播していくなかで「飾り」となっていた（坂本1995）。各遺跡からの出土数の少なさをみると、日常的・実用的というよりは、特別な象徴的な意味合いがあったのではなかろうか。（安達亜希子）

表4 都道府県別アメリカ式石鏃出土数

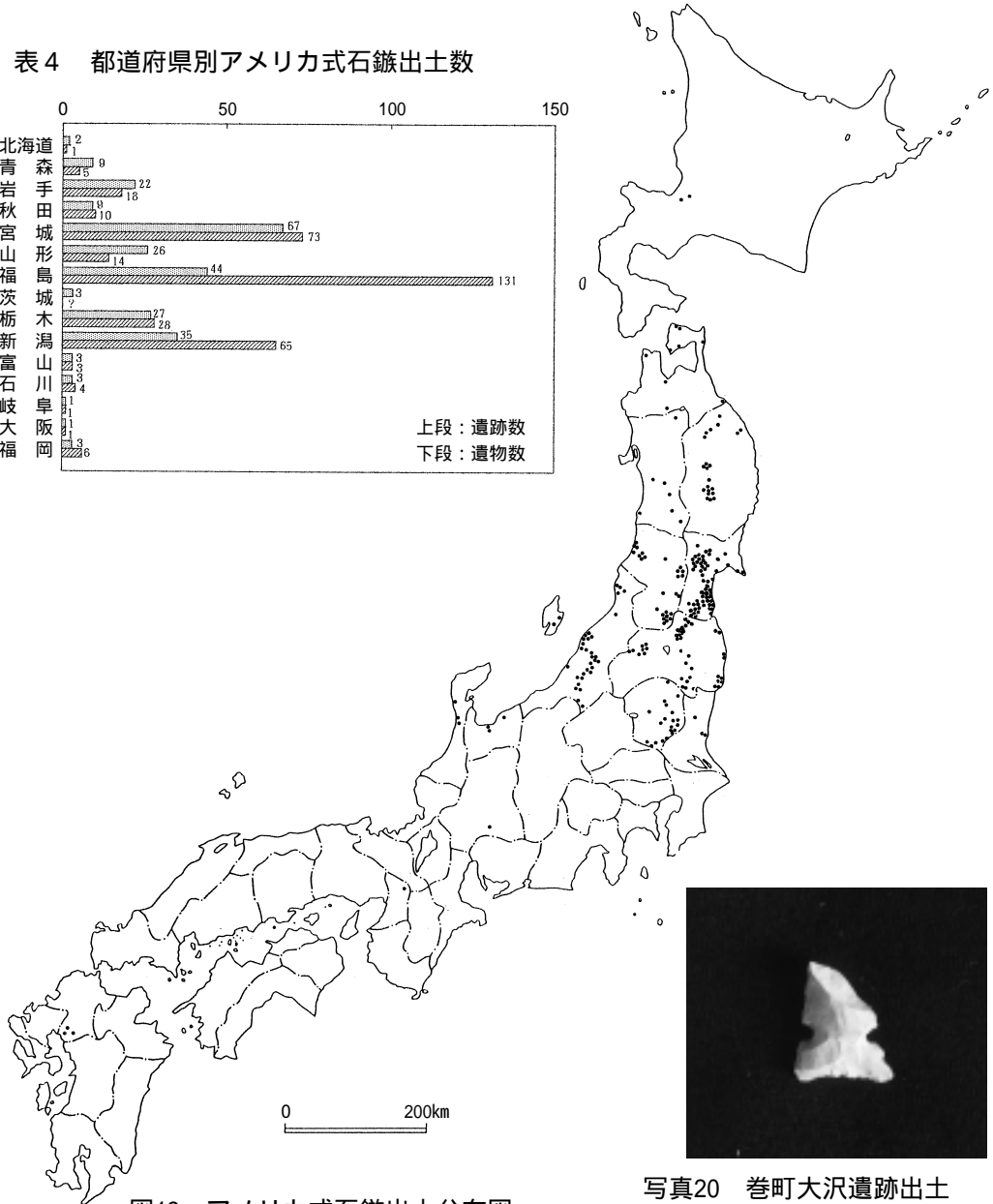
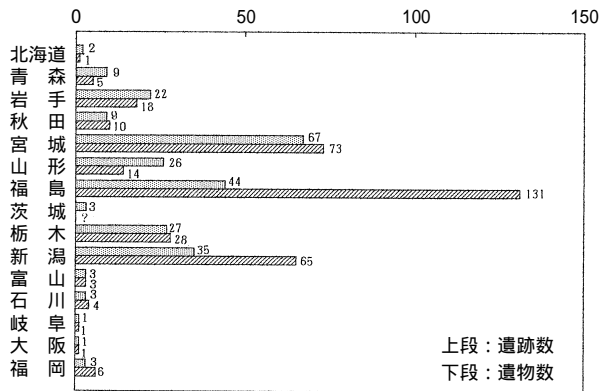


図13 アメリカ式石鏃出土分布図



写真20 卷町大沢遺跡出土
アメリカ式石鏃(原寸大)

<主要引用・参考文献>

石原正敏 1996 「アメリカ式石鏃再考」『考古学と遺跡の保護 - 甘粕健先生退官記念論集』
: 179-195 甘粕健先生退官記念論集刊行会

坂本和也 1995 「アメリカ式石鏃考」『みちのく発掘 - 菅原文也先生還暦記念論集 - 』 : 211-235
菅原文也先生還暦記念論集刊行会

鈴木 源 1996 「アメリカ式石鏃覚書 - 福島県堂平 B 遺跡出土縄文晩期の石鏃について - 」
『史峰』22 : 16-22 新進考古学同人会

Gordon R. Willy 1966 『An Introduction to American Archaeology』 : 62 VOLUME ONE
North and Middle America PRENTICE - HALL

(12) 北方文化との出会い

越後においても弥生後期～古墳前期は、環濠集落や高地性集落が営まれる「倭国大乱」の余波が終息し、それら防衛的集落の廃絶後古墳が造営される、というシナリオが近年描かれるようになった。その一方、畿内を中心とした西からの古墳文化だけでなく、北方からの文化もこの越後地域に流入していることが判明してきた。北海道や東北北部では稲作農耕を主な生業とする弥生文化は定着せず、縄文時代に引き続き狩猟・漁撈・採集を生業とし、なお金属器文化を取り入れた続縄文文化が形成されていた。続縄文時代の後半の後北式は北海道内にとどまらず、図14からもわかるように、下北半島、北上川流域、仙台平野へと南下し、この越後を分布の南限としている。日本海側では秋田県の能代川流域から越後の阿賀野川・信濃川流域まで大きな空白地域となっている。この空白は何を意味するのだろうか。

1982年、刈羽郡西山町内越遺跡において、住居址の覆土から弥生時代後期の北陸系の土器（法仏式）と共伴して後北C 1式と思われる土器片が出土した。これが新潟県内で初めて確認された続縄文土器である。これらの土器片の赤みを帯びた色調、独特の焼成、帯状縄文・微隆起線を伴う文様等は、在地の弥生土器と比して異質である。

1987年に西蒲原郡巻町南赤坂遺跡において、新大考古学研究部の学生が後北C 2・D式の注口土器を表面採集した。この遺跡は農地造成のため破壊されることとなり、1993年巻町教育委員会によって発掘調査が行われた。テラス遺構や続縄文にもある柱穴を伴う墓坑などが発掘され、それらの遺構から古式土師器と共伴する後北C 2・D式土器が多数出土した。これらの土器の中には、古式土師器と続縄文土器の折衷様式であるもの、樺太あるいは沿海州起源ではないかとされる土器片も含まれていた。

1997年には、弥生高地性集落である上越市下馬場遺跡から、北陸系土器に変容されたと思われる後北C 2・D式土器が出土した。南赤坂遺跡でも見られた折衷様式の土器であるが、続縄文の系譜を引く土器としては、この下馬場遺跡が今のところ南限である。

後北C 2・D式に後続する北大式は、東北地方では下北半島・仙台平野を中心に分布し、現時点では鶴岡市山田遺跡が南限である。越後において今のところ発見例は報告されていない。しかし、北大式の後の擦文式土器が南魚沼郡六日町で採集されているなど北方からの文化の波及は後北式に限られたものではないのかもしれない。しかし、点的ではあるが後北C 1～C 2・D式という長期にわたって北方との交流があったということは確かである。

（石井久美子）

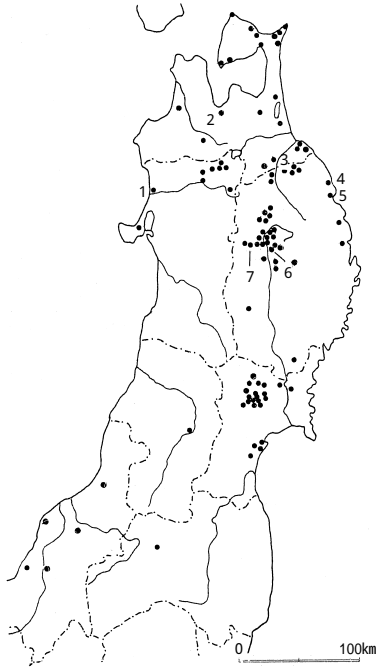


図14 東北地方における後北式土器の分布

- 1. 寒川 遺跡
- 2. 神田遺跡
- 3. 大日向遺跡
- 4. 中長内遺跡
- 5. 古館遺跡
- 6. 永福寺遺跡
- 7. 仏沢遺跡

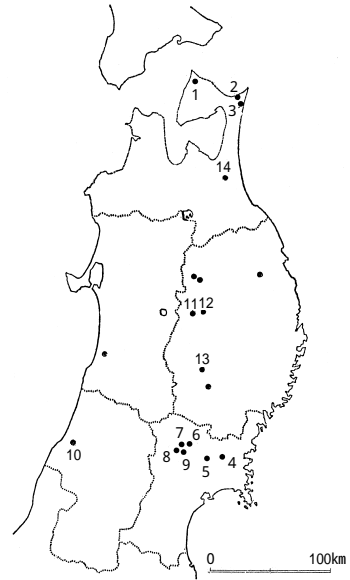


図15 東北地方における北大式土器の分布

- 1. 大間貝塚
- 2. 浜尻屋遺跡
- 3. 大平0遺跡
- 4. 登米遺跡
- 5. 大寺遺跡
- 6. 新田遺跡
- 7. 村山遺跡
- 8. 手取遺跡
- 9. 馬場壇田遺跡
- 10. 山田遺跡
- 11. 仁沢瀬遺跡
- 12. 高柳遺跡
- 13. 岩崎台地遺跡
- 14. 森ヶ沢遺跡

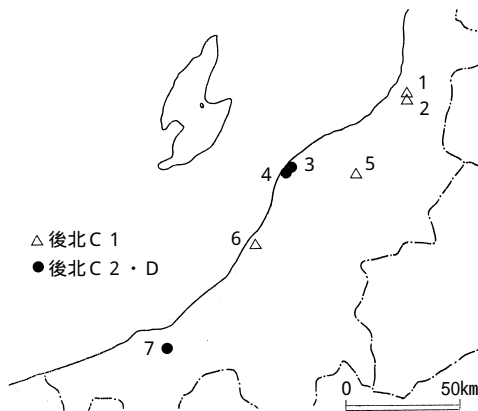


図16 新潟県における後北C1式及び後北C2・D式土器の分布

- 1. 四ツ持遺跡(中条町)
- 2. 兵衛遺跡(中条町)
- 3. 南赤坂遺跡(巻町)
- 4. 御井戸遺跡(巻町)
- 5. 大倉山遺跡(五泉市)
- 6. 内越遺跡(西山町)
- 7. 下馬場遺跡(上越市)

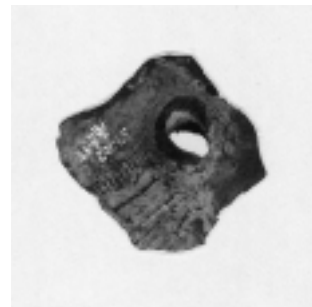


写真21 巻町南赤坂遺跡出土
続縄文土器(最大長 4.2cm)

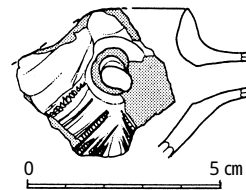


図17 同上・実測図

<参考文献>

前山精明 1999「続縄文」『新潟県の考古学』:240-242 新潟県考古学会

(13) 北陸北東部から会津盆地にかけての古墳の出現

この地域において倭国大乱が終結し、高地性集落が消滅に向かう3世紀中頃、東北系の土器と北陸系の土器の均衡が崩れて北陸系主体となる。同じ頃、伊勢湾周辺（東海西部）の土器も全国へと拡散しており、越後においても、西蒲原郡黒埼町緒立C遺跡、巻町大沢B'遺跡などから、東海西部系土器のシンボリック的存在であるS字状口縁台付甕が出土していることからこの現象がうかがえる。3世紀後半になって畿内で古墳が出現すると、その古墳文化の波及ルートをたどるように加賀の分校カン山古墳、能登の宿東山1号墳、越中の谷内16号墳、越後の稲場塚古墳そして会津の杵ヶ森古墳と、畿内の纏向石塚や箸墓古墳に類似した墳形の最古式の前方後円墳が点在する。畿内勢力の流入は、中頸城郡中郷村籠峰遺跡・横引遺跡や上越市津倉田遺跡で畿内系土器の布留甕が出土していることから裏付けられている。前方後円墳を採り入れられたのは、ヤマト政権と直接接触したと思われるごく一部の首長のみであり、東日本の出現期の古墳は、東海西部の影響の強い前方後方墳が大多数を占める。

越後の最古式古墳とされる稲場塚古墳は、西蒲原郡弥彦村の角田・弥彦山麓に所在する。1993年新大考古学研究室で測量調査を行った結果、畿内の箸墓古墳を彷彿させる墳形の全長27mの前方後円墳であることがわかった。発掘調査は行っていないが、表面採集土器からも4世紀前半の古い様相がうかがえる。会津盆地ではこの時期の古墳として会津坂下町杵ヶ森古墳が挙げられる。周辺の稲荷塚方形周溝墓との関係や箸墓古墳と似た墳形、さらにその1/6の企画であることから築造年代は古墳時代前期前半を下らないとされる。

稲場塚古墳に後続するとされる古墳は、巻町山谷古墳である。1981年に発見され、1983年と1987年の2度にわたって新大考古学研究室により発掘調査が行われた。墳頂平坦面の広い古墳時代前期の前方後方墳であり、墳長は37m、墳形は能登の前期古墳雨ノ宮1号墳の1/2の企画とされる。埋葬施設は、東枕の木棺直葬であり、主体部には、管玉・ガラス小玉・鑿形鉄器があり、くびれ部からは二重口縁の壺などが出土した。山谷古墳と同じ巻町角田山麓には、だ龍鏡や勾玉などの副葬品の伝わる前方後円墳の菖蒲塚古墳、新大で測量調査を行なった葺き石を持つ円墳の観音山古墳がある。角田・弥彦山麓の首長墓は、稲場塚古墳 山谷古墳 菖蒲塚古墳 観音山古墳という変遷が考えられている。

角田・弥彦山麓の対岸の新津・東山丘陵には菖蒲塚古墳と同時期の全長55mの大型円墳新津市八幡山古墳がある。八幡山では、この円墳と同じ尾根づたいに前方後方形周溝墓や環壕集落・高地性集落が発見され、弥生末から古墳時代にかけての越後の戦

表5 北陸北東部及び会津盆地における前期古墳の諸属性

諸説あり

	墳 丘 規 模	墳 形	鏡 の 有 無	段 築	立 地	葺き石
1. 宿東山1号墳	21m	前方後円墳	方格規矩四神鏡	二段築成	丘陵上	×
2. 雨ノ宮1号墳	64m	前方後方墳	神獸鏡の一種	二段築成	山 頂	
3. 稲塚古墳	26m	前方後円墳	主体部未調査	二段築成	丘陵上	×
4. 杵が森古墳	45.6m	前方後円墳	×	二段築成	平 地	×
5. 山谷古墳	37m	前方後方墳	×	三段築成	山 頂	×
6. 菖蒲塚古墳	53m	前方後円墳	だ龍鏡	未調査	丘陵上	×
7. 観音山古墳	26m	円墳	主体部未調査	二段築成	丘陵上	
8. 八幡山古墳	55m	円墳	主体部未調査	二段築成	丘陵上	×
9. 三王山11号墳	23m	造り出し付 円墳	四獸鏡	なし	山 頂	×
10. 緒立八幡神社 古墳	30m	円墳	主体部未調査	二段築成	砂 丘 列 上	
11. 大塚山古墳	114m	前方後円墳	三角縁神獸鏡	三段築成	山 頂	×
12. 堂ヶ作山古墳	84m	前方後円墳	主体部未調査	後円部三段 前方部二段	山 頂	
13. 丸山古墳	20m	方墳	×	二段築成	平 地	×

乱～首長墓の出現過程を追うことができるようになった。同じく新津丘陵の南側には、三条市保内三王山古墳群がある。山頂に営まれた全長23mの造り出し付円墳の11号墳は、組み合わせ式木棺をもち、その中には四獸鏡・管玉・ガラス丸玉・鉄剣などが副葬されていた。小規模な古墳でありながら典型的な前期古墳の副葬品セットをそなえていることが注目される。また、黒埼町緒立八幡神社古墳は、丘陵上に多い越後の前期古墳の中にあってはめずらしく、平野の砂丘列上に位置する径30mの葺き石を有する円墳である。

会津盆地では、古墳時代前期に、杵が森古墳に後続して会津大塚山古墳・堂ヶ作山古墳などの巨大な前方後円墳が造営された。会津大塚山古墳は当初90mといわれていたが、新大考古学研究室他の測量調査の結果全長114m、平野側を意識した三段築成であることがわかった。堂ヶ作山古墳は会津大塚山の北約300mに位置し、比高約110mの山頂のT字形尾根を削り出してつくられている。新大考古学研究室他の調査によって、全長84mの三段築成の前方後円墳であり、墳丘には葺石が葺かれていたことがわかった。出土した土器の年代観などから、同じ一箕支群の会津大塚山古墳に先行すると推定される。

日本海沿岸の前期古墳の分布は、信濃川中下流の集中域を北限として、そこから西



写真22 卷町山谷古墳出土土師器壺
(卷町教育委員会所蔵) 口径 19.6cm)



写真23 卷町山谷古墳出土土師器壺
(卷町教育委員会所蔵) 胴部最大径 24.0cm)



写真24 三条市三王山11号墳出土鉄剣
(三条市教育委員会所蔵) 全長 28.8cm)



写真25 三条市三王山11号墳出土短冊形鉄斧
(三条市教育委員会所蔵) 全長 14.5cm)



写真26 三条市三王山11号墳出土崩仿製鏡
(三条市教育委員会所蔵) 面径 11.3cm)



写真27 大潟町丸山古墳出土土師器碗
(復元口径 7.7cm、器高 6.4cm)

は富山平野西部と能登邑地地溝帯にかけての東日本屈指の集中域に至るまでの約170 kmの間はほとんど空白状態となっている。唯一頸城地方の大潟町丸山古墳は、出土した鉢形土器の年代観などから古墳時代前期～中期前半とされている。このことは、能登半島と越後平野の間が、中間地域を飛ばして海路で直結していたことを物語り、ヤマト政権と能登の首長によって、越後平野が会津進出の橋頭堡として重視されていたことの表れと考えられる（甘粕1993）。肥沃で生産力が高く、かつ内陸交通の要衝でもある会津盆地は、ヤマト政権の東方経略の最終目的地というよりは、さらに、北の米沢盆地へと勢力を伸ばすための前進基地の役目を果たした場所であったのだろう。

（石井久美子）

<参考文献>

- 甘粕 健 1993「越後地方の前期古墳」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』：25-36
「磐越における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ

(14) 赤い鶏

福島県会津若松市堂ヶ作山古墳は最大長84mの前期前方後円墳であるが、後円部の括れ近くの墳頂部から転落したかたちで鶏形土製品が出土した。

頭部と体部のほとんどを欠損するものの、体部の一部と尾部のほぼ全体が遺存する。両者は直接接合しないが、胎土や焼成、色調などから同一個体の可能性が高い。いずれも外面に赤色塗彩が見られる。体部の破片には、焼成前に径1cm弱の断面円形の棒状のものが腹部から背中にかけて貫通することなく途中まで通してあった痕跡がある。尾部には左右外面に線刻による尾羽の表現が認められる。

類例としては、群馬県公田東遺跡1号周溝墓例、石川県吸坂丸山2号墳例、京都府蛭子山1号墳例などが挙げられる。これらは中空な作りの埴輪とは異なり、中実な胴部に棒を刺し込んで墳墓の外表に立てたものであろう。分布は、日本海側、北陸に偏る傾向があり、会津の堂ヶ作山古墳例も日本海側ルートで入ってきたものと推断される。また、いずれも墳墓からの出土例である。なお、埴形は前方後円墳から円墳、方墳（方形周溝墓）にいたるまで、埴丘規模では大は全長145mから、小は14m×12mまで認められ、埴形、埴丘規模にかかわらず採用されている点が注目される。また、堂ヶ作山古墳例、公田東遺跡1号周溝墓例などには赤色塗彩が認められる点で興味深い。他の鶏形土製品や鶏形埴輪、鶏形木製品が赤色塗彩されるのと共通する。

赤い鶏形土製品の性格としては、その出土位置や出土状態をはじめとして、文献や民俗例、民族例、芸能などをも参考にすると、呪的性格が強いものと考えられ、それは死者の再生を祈るものから、死者の眠る聖域を外に知らせ護る境界としての意識が付与されたものと推定される。

なお、最近佐渡郡新穂村蔵王遺跡の古墳時代前期の祭殿風建物付近から鶏形土製品が2点発見された。併せて、その周辺から古墳の副葬品となるような内行花文鏡、珠文鏡の2面の小型仿製鏡が出土した。これも葬送儀礼に関わるものであろうか。

東北部の会津盆地にある堂ヶ作山古墳で鶏形土製品の存在が知れたことにより、古墳時代前期の前半に前代の弥生時代にあった鶏形を墳墓祭祀に使用するという習俗が、いち早く東北部までに移入されていることが明らかになった。（橋本博文）

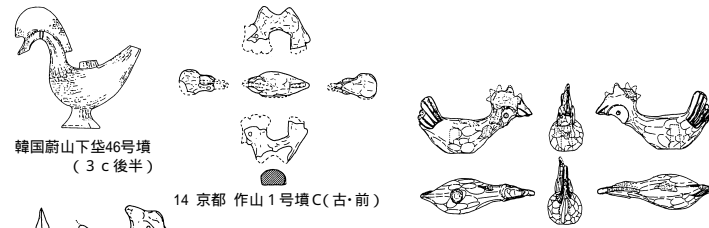
<参考文献>

小川忠明 1998「新穂村蔵王古墳集落遺跡の調査」『新潟県考古学会第10回大会研究発表・調査報告書要旨』：41-52 新潟県考古学会

橋本博文 1996「鶏形埴輪の起源」『堂ヶ作山古墳』：73-87 堂ヶ作山古墳調査団・会津若松市教育委員会

凡例

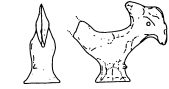
- 鶏形土製品(中実)〔A類〕
- 鶏形土製品(中空)〔B類〕・鶏形土器〔C類〕
- 鶏形土製品(中空、埴輪)
- 鳥船形土製品〔D類〕
- 鳥形土器〔E類〕
- 鳥形木製品



12 韓国蔚山下袋46号墳 (3c後半)

14 京都 作山1号墳C(古・前)

13 石川 吸坂丸山1号墳B(古・前)



32 鳥取 福市吉塚A 3 S10(古・前)



31 鳥取 秋里(古・前)



15 京都 蛭子山2号墳(古・前)



16 京都 蛭子山1号墳(古・前)



11 石川 漆町A(弥・後)



石川 漆町B(弥・後)



石川 漆町C(弥・後)

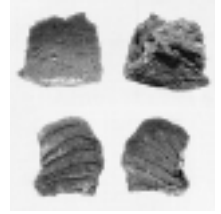


写真28

堂ヶ作山古墳出土 鶏形土製品



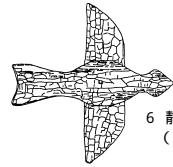
1 福島 堂ヶ作山古墳(古・前)



2 群馬 石田川(古・前)



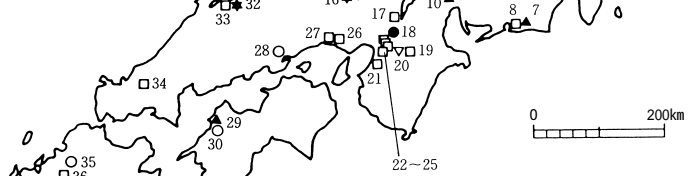
4 千葉 道庭(弥・中)



6 静岡 鹿塚 (弥・後、木)



7 静岡 蔵平 (弥・後)



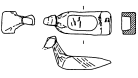
28 岡山 雲山鳥打1号墓(弥・後)



19 奈良 纏向石塚 (古・前、木)



21 大阪 池上(弥・中、木)



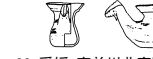
奈良 纏向(古・前、木)



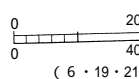
29 愛媛 中村松田(弥・後)



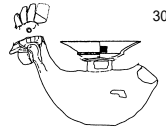
18 京都 平尾城山(古・前)



30 愛媛 宮前川北斎院(古・前)



(6・19・21・30・35)



35 福岡 津古生掛(古・前)



愛知 朝日B(弥・後)



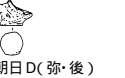
10 愛知 朝日A(弥・中)



愛知 朝日C(弥・中-後)



愛知 朝日D(弥・後)



愛知 朝日E (弥・後)

図19 鳥形製品出土分布図

(15) 壺形埴輪の伝播

- 新潟県飯綱山10号墳出土壺形埴輪をめぐって -

1997年夏、新潟県南魚沼郡六日町で新潟大学考古学研究室の調査によって新潟県内では初めての埴輪が発見された(カラー写真 - 6)。出土古墳は、飯綱山10号墳という5世紀後半代の初期群集墳の中核墳である。径約36mの円墳の葺石の内側、約20~30cmの墳頂外縁部には「壺形埴輪」ともいべき特異な壺形土器が約1.5m間隔で等間隔に据えられていたようである。据えられた位置の円周に等間隔に存在すると仮定した場合、およそ25個体が必要になる計算である。現に、調査時の狭い範囲のトレンチ発掘ではあったが、別個体と考えられるものが最低5個体は数えられた。口縁部が二重口縁で、底部は穿孔していないが、胴部対向位置に焼成前のあけび形の透孔が2孔あく。大きさには若干のばらつきがあるものの、形が近似し、容器としての土器に孔をあけて仮器化させている。しかも、それが複数・多量に、円筒埴輪と同様な位置に並置される姿は埴輪的であり、「壺形埴輪」と呼んでも差し支えない。別個体の多くに靨痕があるということは、同時期に製作していることを物語っており、シルエット様の黒斑の在り方からも近接して複数個体を同時に焼成したことがうかがわれる。ただし、窯は使用していない。一方で、内・外面調整に刷毛目が使用されず、殆どヘラナデ・指ナデで仕上げており、前期というより中期的な土器の製作技法が見られる。中には、内面をヘラミガキで仕上げている個体も存在する。恐らく埴輪作りの専門工人が製作したのではなく、土器作りの工人が製作したのであろう。

このような透孔を持つ壺形埴輪の類例は、畿内から中部、関東にかけて認められる。ただし、これらはさらに底部をも穿孔している。また、胴部や頸部に透孔を持つ壺を器台円筒に載せたものを合体させたかたちの、肩部や頸部に透孔を穿つ朝顔形埴輪の例は、南は九州肥後から北は北関東の上野まで見られる。時期的には、前者は5世紀前半代まで、後者は5世紀第 四半世紀まで存在する。

以上、この種の壺形埴輪・朝顔形埴輪が共に北関東、上野、北武蔵、北信を中心に分布している点は、両者の関係が緊密であったことを物語っている。そのうち特に上野に多く、飯綱山10号墳の壺形埴輪の隣接する上野からの系譜が示唆される。

なお、この新潟県地域に円筒埴輪をはじめ、その他形象埴輪が導入されず、壺形埴輪が採用された背景には、ランク差というよりはその系譜差が想定される。

(橋本博文)

<参考文献>

橋本博文 1998「飯綱山10号墳1996年度の調査のまとめと今後の課題」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』1:78-91 新潟大学人文学部

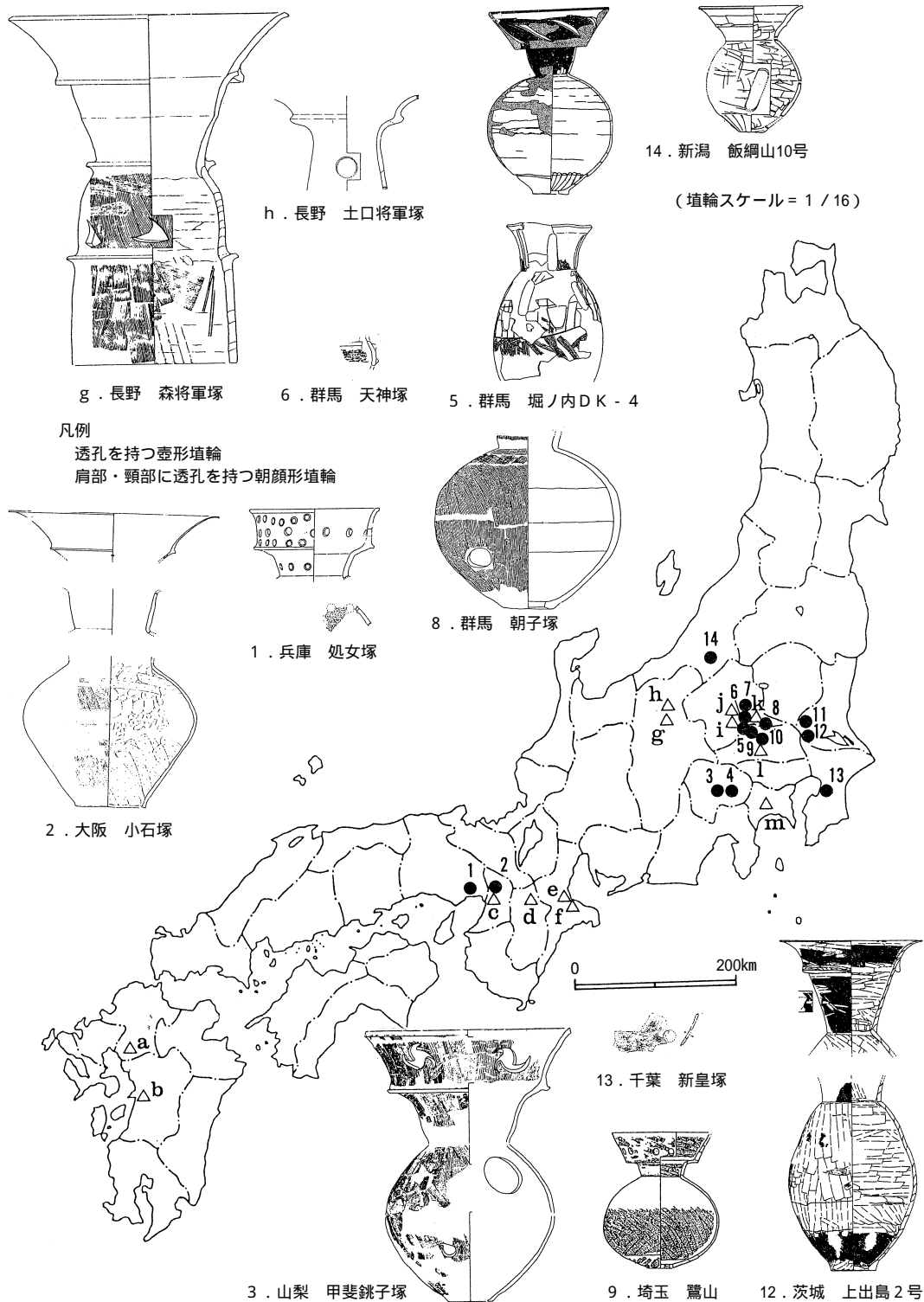


図20 胴部・頸部・口縁部などに透孔を有する壺形埴輪(朝顔形埴輪)分布図

(16) 初期群集墳の出現 - 飯綱山古墳群 -

新潟大学考古学研究室では、1995年より、新潟県南魚沼郡六日町余川字飯綱山に所在する飯綱山古墳群の発掘調査を実施している。これは、5世紀後半代の初期群集墳の実体解明を目的にしたもので、1995年には古墳群中最大の10号墳・27号墳およびその周辺の測量調査を実施した。その結果として、共に径36mの円墳であることが確認され、さらに10号墳の墳丘は2段に構築され、新潟県内でも希な葺石が存在することが判明した。96年には、両古墳の更なる解明を行うために、27号墳の墳丘調査と10号墳の主体部と墳丘調査をし、97年・98年には、27号墳と65号墳の主体部、そして墳丘の調査を実施した。

調査の成果としては、まず10号墳において、96年の調査で新潟県内で初めての埴輪が発見されたことが特筆される。また、1888年当時に発掘された主体部の実態を明らかにしようとしたが、完全に掘り尽くされており、竪穴式石室が構築されていたことが推定される程度であった。出土遺物としては鉄鏃・短甲・鉄斧・馬具等が認められた。このうち短甲は、現在地元に残る革包み・鉄覆輪の両横矧板鋸留式短甲と直接は接合しなかったものの、同一個体と想定されるものである。また、初期馬具の木芯鉄板張輪鐙の存在が知られた点は大きな成果があった。他に、陶器TK47型式併行の須恵器大甕が墳頂に置かれていたと考えられる。また発掘の結果、葺石は墳丘の上段部分にだけあることが判明した。そして96年の調査により、27号墳は、東・西に2つの主体部を持つ古墳であることが確認され、翌年の調査で西側主体部から北陸の中でも最多であろう1,400個近い数の滑石製の白玉、数点のガラス丸玉、青銅製の腕輪である銅釧が出土した。白玉の集中出土地点である主体部は石材や粘土が使用されていないことから木棺直葬であったものと推定される。また東側主体部では多数の赤色塗彩された底部穿孔の壺や埴、坏底部穿孔の高坏が集積されたように出土した（カラー写真 - 5）が、10号墳のような胴部穿孔の壺形埴輪は確認されなかった。それと盗掘坑廃土中から鉄剣の破片とノミ状鉄製品が出土した。しかしこの東側主体部と考えている土器集中区は、主体部の残存状態が悪く棺の一部分と思われるものしか検出されず、埋葬方法や棺の置かれた状態等は不明である。なお、27号墳は10号墳と違って葺石を欠き、ブリッジが存在することが明らかになった。一方、小型古墳の65号墳では、周溝の底面付近から鉄鏃が出土した。

以上のように、過去4回にわたる調査によって飯綱山古墳群では、5世紀前半より後半にかけ、27号墳・10号墳という大型円墳を頂点として中規模の31号墳・35号墳、そしてさらに小さな古墳というピラミッド構成の社会構造が想定されるようになった。

また10号墳出土の壺形埴輪などから、隣接する上野地方等からの影響があったものと推定される。今後の調査・研究によって飯綱山古墳群の更なる実体解明を目指したい。

(山口 隆・橋本博文)

<参考文献>

相田智子ほか 1998 「 - 新潟県南魚沼郡六日町 - 飯綱山10号墳発掘調査報告 (1996年度)」 『新潟大学考古学研究室調査研究報告』 1 : 47-94 新潟大学人文学部



写真29 65号墳出土鉄鉾 (左約16cm)



写真30 10号墳出土鉄斧 (長さ9.0cm)

(17) 横穴式石室の伝播 - 浦田山古墳群 -

浦田山古墳群は新潟平野北端の村上市郊外にある浦田山丘陵上に存在する。1983年に村上市史編纂に伴って、磐舟柵に関連する防御施設の可能性が高いと考えられていた「石廓堡」の性格を再検討しようということになった。1989年に行われた第1次調査で浦田山の地形測量を行い、石室の遺存状態が確認された。その結果、従来の第1石廓堡が無袖の横口式石室、第2石廓堡が竪穴系横穴式石室であると判断され、「石廓堡」は古墳の石室と認められることとなった。1994年には第2次調査が行われた。2号墳からは石室の東の溝状遺構の落ち込みから土師器鉢が、旧トレンチ跡からは内面黒色処理された土師器片が2点出土した。時期は、2号墳が埋葬施設と出土土器から6世紀前半と考えられており、1号墳はそれとはやや時期を隔てた6世紀中・後葉と推測されている。また、それらの北東にのびる尾根で、1号墳と同様な板状頁岩が2ヶ所で確認されており、少なくとも4基の古墳があった可能性が指摘されている（甘粕ほか1996）。

県内において横穴式石室を内部主体とする古墳が出現するのは6世紀前半で、浦田山古墳群はそれまで古墳の空白地帯であった新潟県北部に突如出現した古墳群である。県内でこの時期の横穴式石室を有する古墳と考えられているのは、佐渡の真野湾に面する台ヶ鼻古墳のみで、他は木棺直葬の古墳である。県内で横穴式石室が定着するのは6世紀末以降と考えられており、一足早く横穴式石室を採用していることが注目される。北陸では、5世紀半ばに若狭地方で北部九州の強い影響を受けていち早く横穴式石室が導入されるが、県内の浦田山2号墳・台ヶ鼻古墳の石室も九州色が強く、6世紀前半代に若狭を介した日本海ルートによる波及があったことがうかがえる。ただし、その直接のモデルといえるような古墳は九州にも若狭にも見られない。土器では、2号墳の土師器鉢は口縁部と体部の境に段を有しており、須恵器坏蓋を模倣したものと考えられる。この形態は県内では確認されていないが、福島県・山形県など、東北南部の日本海側に類例が確認できる（図22）。これらのことから、浦田山2号墳の被葬者が九州や若狭からの移住者ではなく、それらの地域と関わりを持った在地の有力者であったことが想定されている（甘粕1996）。また、集落出土の土器では、この時期新潟県地域と庄内平野では類似した様相を持つことから両地域が密接な関係を持っていたと考えられ、庄内平野まで日本海を利用した交流がなされていたと推測される。

（相田泰臣）

<参考文献>

甘粕 健ほか 1996『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書』新潟県村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室

甘粕 健 1996「第6章 浦田山1・2号墳の調査のまとめ」『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書』：55-64 新潟県村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室

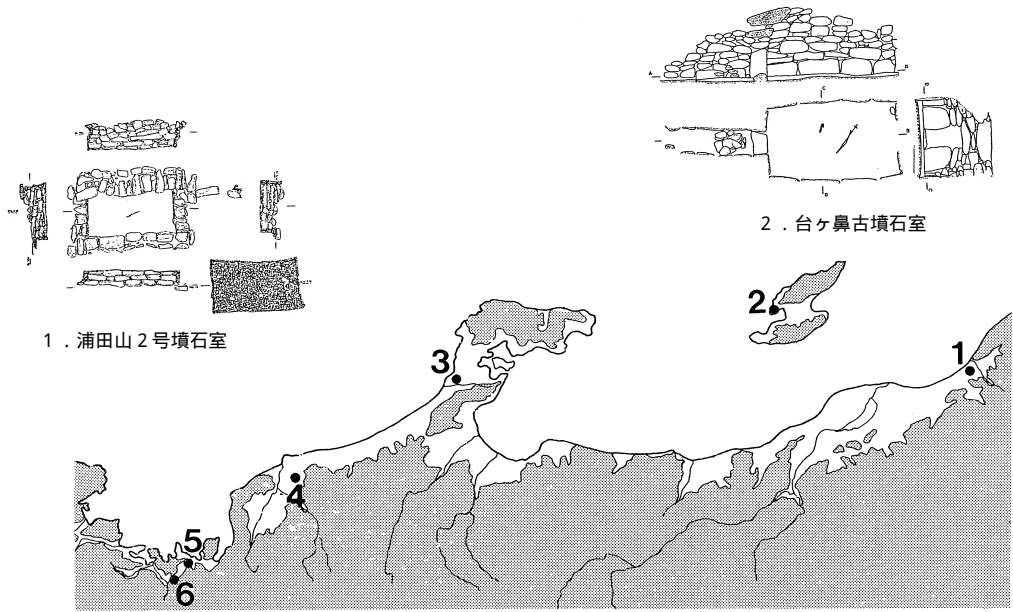


図21 北陸における主な初期横穴式石室

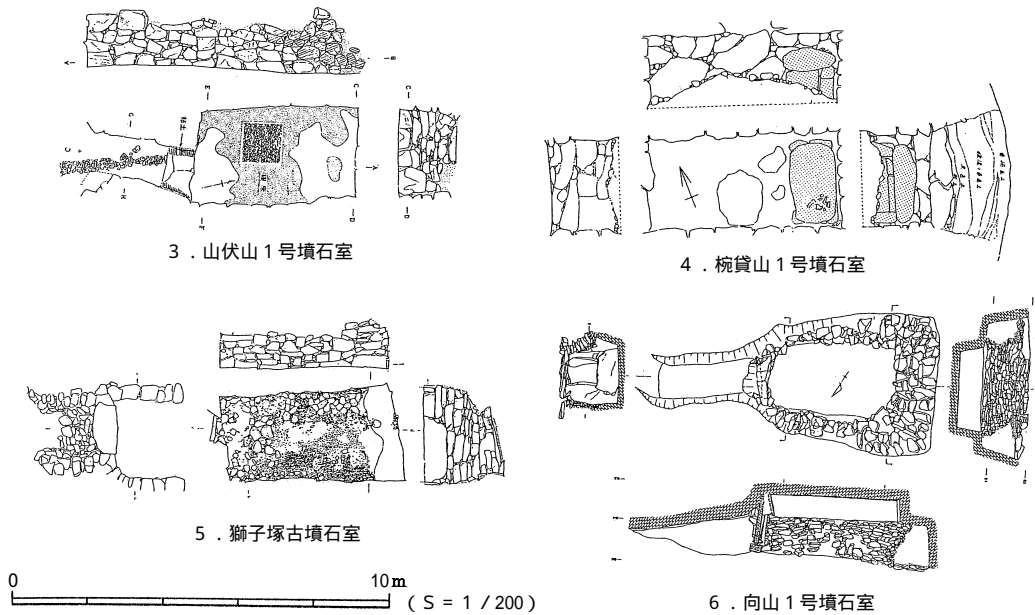




写真31 村上市浦田山 2号墳出土土師器鉢

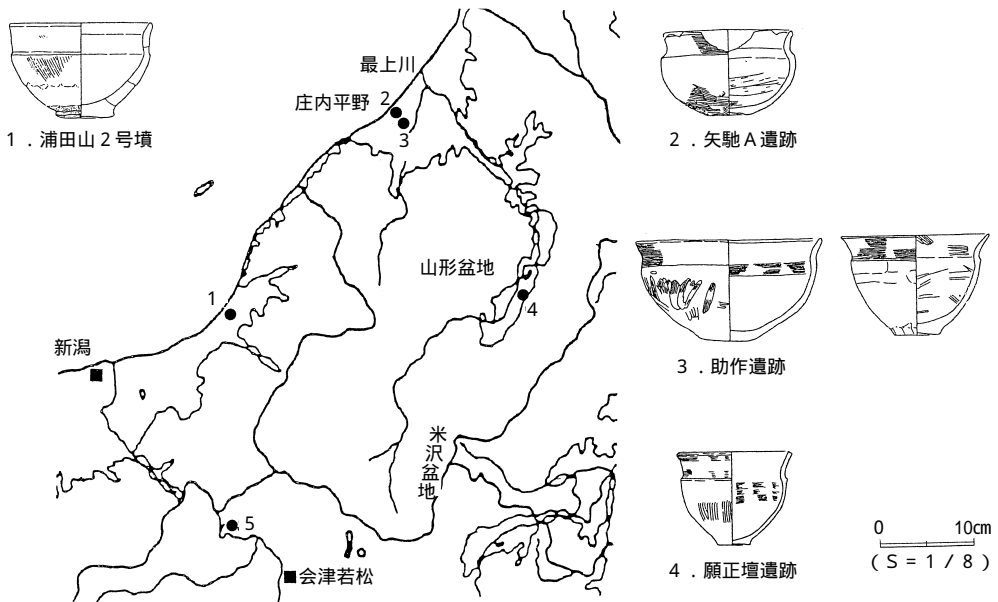
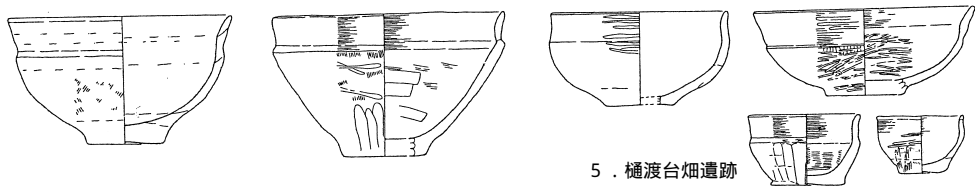


図22 浦田山 2号墳出土土器の類例



(18) 古墳時代の首長層居館と奥津城

栃木県塩谷郡氏家町に所在する四斗蒔遺跡からは、1988年に古墳時代前期の首長層の居館址が2基発見されている。東西に並ぶ居館址は、いずれも濠と柵列を巡らし方形を基調とするが、西側の1号居館址は南・北辺の中央に張り出し部を有する。規模は、1号居館が張り出し部を含まないで東西39m、南北41m、2号居館が東西43m、南北52mと後者が2回りほど大きい。

89年度の調査によって、1号居館址の東・西辺の中央には張り出し部が無く、柵列が切れ橋が架かって出入り口となっていたことが明らかになった。また、古墳時代の首長居館に一般的な断面逆台形の濠の外側には土塁が存在した可能性が高く、濠を掘った土を外側に処理していた様子がその濠を埋める土の流れ込みの状態から窺えた。前代の弥生環壕集落の名残りであろうか。さらに、1号居館は濠内堆積物の珪藻分析の結果や、木材・植物種子のクリなどの遺存状態、淡水産のカラスガイの出土などから水を湛えていたと判断された。濠の規模は、上幅3m前後、確認面からの深さ1.2m程である。

97年度の調査は前回の89年度の1号居館外郭施設の構造確認と内部での大型竪穴遺構の検出の調査成果を承けて、1号居館址内部の構造を明らかにすることと、大型竪穴遺構の構造・性格を究明することを目的に調査を実施した。その結果、竪穴遺構が計7基確認された。そのうち、5基が辺の向きや隅丸方形の平面形態、覆土の様相、出土土器などから同時期のものと判断された。居館内は建物がおおかた左右対称を意識して配置されている。

大型の1号竪穴は南東隅を古墳時代前期末の2号竪穴によって破壊されていた。1号竪穴は東西約8m、南北約7.4mの大型なものである。古墳時代前期に溯り、1号竪穴の土器と周囲の濠の中の土器が同時期のものであることが認められ、1号竪穴が周囲の濠と伴うことが判明した。その1号竪穴出土土器は特定の器種に偏ることなく、甕、壺、埴、高坏、器台などの種類が満遍なくそろっていることや、1号竪穴に炉が存在することなどから1号竪穴に居住性が確認された。長い東西方向に棟を持つらしく、東・西壁のほぼ中央に壁中の棟持ち柱を有する。なお、1号竪穴の床が比較的しまっていないことや、炉の土があまり焼けていないことなどから、長期の居住でなく、短期に廃絶したことが窺える。ちなみに、1号竪穴の覆土中から多量の焼土と炭化材が出土した。一部上屋構築材も検出されている。火をうけているのであろう。

次に、竪穴の平面形態が、古墳時代前期の1、3、4、5号竪穴の隅丸方形から、古墳時代末の2号竪穴の方形に移行していることが明らかになった。また、東西の出

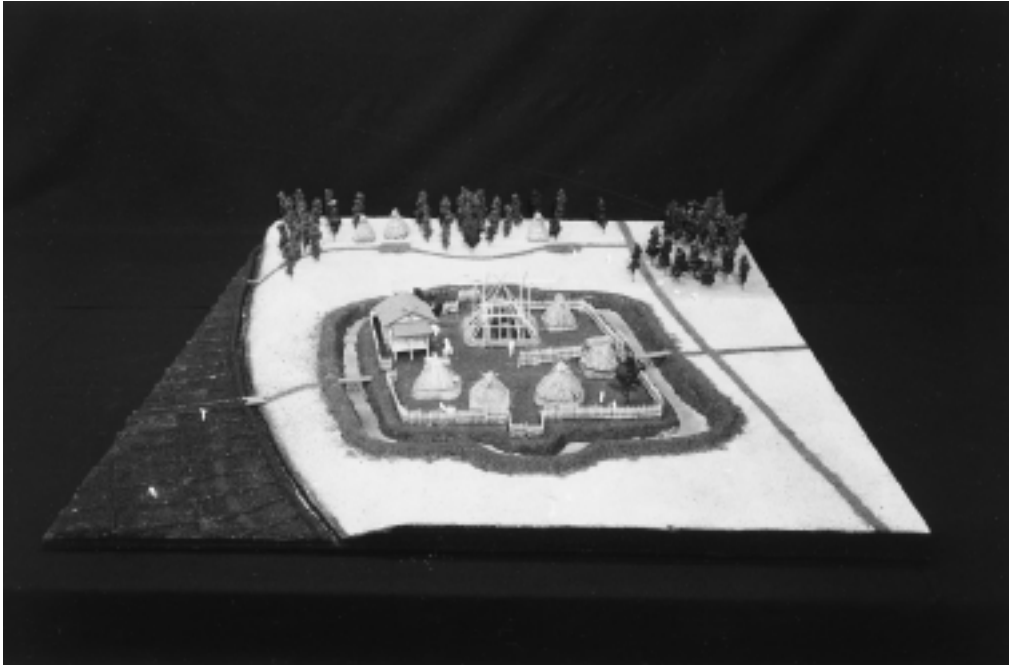


写真32 四斗蒔遺跡 1号居館 復元模型

入り口を結ぶライン上、東半に径約30cmの柱穴が約2 m間隔で直線的に並んでいることから、塀があったことが想定される。その塀によって内部が南北に2分割されていたことが窺われる。その南半部分には1辺6 m弱の3、4、5、7号の小型の竪穴が存在することが知れた。居館の中央、先の1号竪穴の前面、南側には、東西約15m、南北約13mの中庭状の空間があることが判明した。

居館北半部には有力者の住まいの跡と考えられる大型の1号竪穴を中心に、その向かって右手に小型の竪穴、8号竪穴、左手に2間×4間の掘立柱建物跡が南北軸で検出された。後者は一部束柱を持ち、倉庫兼祭殿のように考えられる。いずれにせよ、北半は有力者の居住、祭祀、経済の空間と推定される。このように、古墳時代前期の数少ない首長居館内部の建物配置が判明した例として貴重である。

片や、2号居館に関しては、98年度の調査で、1号居館のような南・北辺の両辺中央に張り出し部が無いことが明らかになった。濠の断面形は1号居館と同様の逆台形を呈する。濠の規模は居館全体の大きさに比例して1号居館よりも大きく、上幅約4.1 m、確認面からの深さ1.6m程である。濠内に木材が遺存していたことから、湛水していたと推定される。幅1.3mの調査範囲内ではあるが、濠底には外側にやや傾く径8～15cmの杭状の加工木材が2本確認された。掘り方を伴わず、濠底に打ち込まれた下部先端は尖らせてある。上部の先端の遺存が悪いが、逆茂木の可能性がある。濠の



写真33 栃木県四斗蒔遺跡 1号居館 1号住居址出土叩き甕

防御性が示唆される。

出土遺物では、四斗蒔遺跡 1号居館 1号住居址出土の畿内系叩き甕が注目される。栃木県内 2 例目の発見という希少なもので、東国でも稀な出土例である。当時の中央の情報や物資の集積センターとしての機能を果たしていた居館の性格が窺われる。

居館と古墳との対応関係という点では、四斗蒔遺跡東方約400mに位置する喜連川丘陵上の古墳、ハットヤ北古墳が全長20m以下の前期前方後円墳と考えられ、眼下に四斗蒔遺跡を見下ろして注目される存在である。

一方、四斗蒔遺跡の北西約400mには外堀が方形で、内堀が円形の 2 重の堀をもつ円墳のお旗塚古墳が存在する。居館と違って堀には常時湛水の形跡は見られない。お旗塚古墳の規模は墳丘部の直径が約22mほどであるが、外堀の外側で計測すると 1 辺約42mとなり、四斗蒔遺跡 1号居館の 1 辺約40mとほぼ同一の規模を有する。堀の中からは、四斗蒔遺跡 1号居館でも確認されている東海系の S 字状口縁台付甕が出土した。堀の断面形態も四斗蒔遺跡 1号居館とお旗塚古墳とでは酷似している。出土土器の型式もほぼ同時期で両者の密接な対応関係が考えられる。なお、お旗塚古墳からは焼成前底部穿孔の壺形土器が確認された。古墳時代の首長居館と古墳との規模が比例的に対応することを裏付ける資料として重要である。 (橋本博文)